



道 求

第七號

第三卷

(行發日一圓一月每)行發日一月九年九卅治明

可露物價郵種三第 日六廿月二十年一卅治明

求道第叁卷第七號目次

求道

◎煩悶の下に光明あり

感謝

◎旅の暮◎曉起所感◎鴉聲◎善光寺◎大慈航

◎信樂

▲自然法爾章

講話

◎自然法爾章

近角常觀

聖傳

◎チャータカ釋尊傳——歸省

雜錄

◎波斯紀行

鈴木 悌

講義

◎歎異鈔——第一章の續き

近角常觀

歌詠

◎偶詠十首（短歌）

左千夫

◎勿來關にて（同上）

甲之

時報

◎傳道日報

旭村 生

每日曜午前九時

求道學舍

（本郷森川町一番地）

毎土曜午後二時

第一求道會

（九段坂佛教俱樂部）

毎月二日午後七時

第三求道會

（日本橋堀越町説教所）

求道

第叁卷
第七號

煩悶の下に光明あり

吾人が切に現代思潮の爲に煩悶したまへる人に向て警告せんと欲することは、煩悶の下に光明あり。即今其の脚下に樂地ありといふことである。華嚴の瀧に投じ、阿蘇の噴火口に投ずる人は今や將に大安慰を得べき眞際まで來てるながら、自ら身を水泡に歸せしめ、生きながら心を火燄の中に入るるのである。未だ光を見出さぬ間の所作なれば致方もなきとなるも、徒に虚飾と淺慮とを發表して人の笑を買ふのみならず、全體死後の境界につきて如何に考へつゝあるのであらう。勿論其志の憐むべきは察するに餘あるも、如何程煩悶に陥ればとて自ら死を招くといふは宗教の説きつゝある來世苦樂の境につきて一願せぬものにして、抑々其所作は古聖賢に對する一大侮蔑である、絶對の救済に對する根本的罪惡である。

吾人は世の煩悶して空しく身を亡す人に向て警告する。佛陀の光明は正に諸君の上を照しつゝあるのである、須らく一

刻も早く仰て之に安んずべし、若し直ちに之に安んずること出來ずとも必ず、必救済にあづかるは毫髮の疑なきことなれば、たとひ如何なる境遇にあるとも確然不動にして最終曉の明星輝くときまで待たなければならぬ、吾人の切なる忠告は「直に光を仰げ、仰ぐこと出來ねば待て」といふことである。猶一步進みて煩悶を解かんと爲に道を求めつゝあるの人に向て警告する。抑々宗教を煩悶を解く手段と考へては居らぬか、信仰といふことを己を安んずる道具と考へて居らぬか、佛陀を以て恐多くも我煩悩を拭ひ去るべき雜巾の如く考へて居るのはなきか。全體佛陀は恵みの親である、生命である、我々は全身を投じて之に任ずるのである、其足下に感泣するのである、我々は生殺與奪如何様とも其御心に任せ奉りて、恰も慈母の懷に抱かれたる如くある、我等は佛陀の御方に任じてこそ安心することが出来るのである、我等か佛陀を手段として煩悶を去らんとし、様々横着驕慢な考へては信仰に入ることは出來ぬ。

次に吾人は道を求むるが爲に煩悶して居る人に向て警告する。我は是程まで求めて居るに光の來らぬは残念であるとは思つて居られぬか、道條は解つて居るが實感の伴はぬには困

るとは思ふて居られぬか。全體我は求めて居ると思ふて居るのが誤である。既に業に佛陀が我等を求め、我等を喚びたまふのである。而して自分で求めつゝあると思ふて居る人は自分て遁れつゝあるのである。又道條が解つて居ると思ふて居るのが誤である、實は少しも解つて居らぬのである、全體佛の恵みは解つて喜ぶのではない、恵を喜びて疑ふことの出来ぬのが信じたのである、明らかになつたのである。抑々我等が大に喜びて初めて佛陀があるが如く考へるのが誤である、我等は喜ぶも喜ばざるも、氣が附きても氣が附かずとも、假令之に背くとも、且つ常に佛陀は我等を憐み、悲み、愛し、慈しみたまひつゝある。我等は此の如き佛陀に對してみれば、我等より求めずして光明自ら來り、「何事の在しますかは知らねども、唯ありがたさに涙こぼるゝ」と感泣し奉るの外ないのである。

此の如く佛陀の御恵みが我等の胸中に届きたるが即ち口に溢れ出て、南無阿彌陀佛となるのである、是實に過去の日本に於て源平時代の煩悶を一掃して鎌倉時代の清廓なる一世を照したまひし光明である。法然聖人が

南無阿彌陀佛。往生之業。念佛爲本。

といふ一大法幢は當時心靈界の中心である。上下、貴賤、文武、僧俗、皆其獅子吼の下に雲の如くに集り來りたるのである。花の盛の敦盛を討ちて無常を觀したる阪東武者熊谷直實も馳せて聖人の門下に剃髮出家したのである。東大寺の大佛を燒討にして聖武光明兩聖の偉觀を兵燹に委したる平家の落武者重衡卿も書を以て聖人に道を求め安心して餓られたのである。加之山賊海賊強盜竊盜放火殺害を極めたる津の國の耳四郎も檐の下に聖人の教を聞き遂に改悔懺悔して其行を悛め、一世の達識、人臣の至極たる關白兼實公も冠を傾けて聖人の法筵に感涙を注がれたのである。實に南無阿彌陀佛の名號は一切衆生があこがる、大慈の父の御名である、一切衆生が安んずる大悲の母の御懷である、一切衆生の兄弟か護持養育を蒙れる親切溢るゝ乳母の乳房である、誰か此念佛の下に全身を投じて渴仰せざるものやある。當時濃厚博識の聞えある聖覺法印も、從順如法なる信空上人も聖人の門下に安心を見出されたるのである。而して同じく聖人の南無阿彌陀佛往生之業念佛爲本の御教を聞き敬虔の念を以て滿たされ、信樂の悦を以て溢れたる親鸞聖人の胸の中は即ち是である。

しかるに念佛よりほかに往生の道をも存知し、また法門等

をもしりたるらんところにくゝおぼしめしおはしましてはんべらんは、おほきなるあやまりなり、親鸞にあきては、たと念佛して彌陀にたすけられまらすべしと、よきひとのおほせをかうむりて信するほかに別の仔細なきなり、たとひ法然聖人にすかされまらせて念佛して地獄におちたりともさらに後悔すべからずさふらぶ。

此の如く全身を擧げて如來の光明中に投じてみれば、何人か心を安んぜざるものかある。佛陀の御恵みの下に智慧の區別もなく境遇の善惡もない、大慈悲に對しては吾人は一點の私を挟むべき餘地を見出さぬ、何を自ら求めて苦しみ、徒に小智淺慮を費して煩悶懊惱する、況んや自ら身を水火の中に投ぜんとするが如きは此如き萬代の光明たる古聖賢に對する侮蔑たるのみならず、大慈大悲の如來の悲憫救済に對して實に申譯なきことである。全体此の如き大慈大悲に對して善惡の沙汰をなすが如きは根本的の誤である、抑々人の煩悶なるものは自己の境遇の善惡につき、倫理行爲の善惡につき、人情につき、信念につき、萬事につきこの善惡の計らひなるものである、吾人は此の如き絶對の大慈大悲に對しては此計らひは無用である。

まことに如來の御恩といふことをば沙汰なくして、われもひともし、よしあしといふことをのみまうしあへり、聖人のおほせには善惡のふたつ總してもて存知せざるなり、そのゆゑは、如來の御心によしとおぼしめすほどに知りとおぼしめすほどに知りたるにてもあらめ、如來のあしとおぼしめすほどに知りとおぼしめすほどに知りたるにてもあらめ、煩惱具足の凡夫火宅無常の世界はみなもてそらごと、たわごと、まことあることなきに、たと念佛のみぞまことに在しますとこそ仰は候ひしか。

抑々善し、惡しの沙汰をするのは煩惱具足の身を以て善くすることが出來ると考へるからである、火宅無常の世界に居ながら惡しさを避けんと企てるからである。全体人間は罪惡の塊である、世界は泡沫の夢である、絶對の闇黒、絶對の迷盲、絶對の虚妄である、獨り此間を照したまふ、絶對の光明、絶對の眞實、絶對の清淨は佛陀である。如來である。念佛である。唯佛一道獨清閑である。吾人は凡ての計らひを擲て、如來の慈悲海中に投入すべきものである。此に至りて如何なる境遇も、如何なる理想も、如何なる倫理的標準も、人生的欲望も、野心も、眞面目も、何れも人間的の小さな立場を翻へして、

如來の御心に融和して、同一鹹味の信仰となるのである。此に至りて煩悶懊惱も恰も宿夢の如くである、而して眼底に耀き来るものは盡十方無碍の光明である。

煩悶の下に光明あり

此一語以て幾多の煩悶者に警告する次第である。吾人は決して煩悶を嘉みする者ではない、無碍の光明は一切衆生の上に光被して、如何なる煩悶をも照し破るといふことを断言し警告するのである。須らく即今其光を仰げ、即今仰ぐあたはずんば、自づから其光の來る時を待て。世の煩悶者が此の如き佛陀の救済あることを知らずに、むざ／＼死を急ぐを見て斷腸の想に堪へぬ、冀くは同信の人々と共に、せめて此等の人に此大安慰あることだけなりとも知らしめて、其光明の曉の來るを待たせたい。(八月二十七日朝信州善光寺にて記す)

自然法爾章

親鸞八十八歳御筆

獲ノ字ハ因位ノトキナルヲ獲トイフ。得ノ字ハ果位ノトキニイタリテカ
ルコトヲ得トイフナリ。名ノ字ハ因位ノトキノナチ名トイフ。號ノ字ハ
果位ノトキノナチ號トイフ。自然トイフハ自ハオノツカラトイフ行者ノ
ハカラヒニアラズシカラシムトイフコトナリ。然トイフハシカラシム
トイフコトハ行者ノハカラヒニアラス如來ノチカヒニテアルカニヘニ法
爾トイフハ如來ノ御チカヒナリケルニヘニシカラシムルチ法爾トイフ。コ
ノ法爾ハ御チカヒナリケルニヘニシテ行者ノハカラヒナチチモチテコ
ノニヘニ他力ニハ義ナキヲ獲トストシルヘキナリ。

心慮して思通かなり、靈界無窮にして聖衆森森たり、冥々
の間身は諸佛護念の間に在り、道友亦側に在りて日々講話
を校訂す、我筆を執りて淵默、友亦變語なし、寺は是れ光明寺、
山は是れ弘誓山、遠く善導和尚の歸三寶偈を默誦し奉る、曰

歸命盡十方	法性眞如海	報化等諸佛	一一菩薩身
眷屬等無量	莊嚴及變化	十地三賢海	時功滿未滿
智行圓未圓	生死盡未盡	習氣亡未亡	功用無功用
證知未證知	妙覺及等覺	正受金剛心	相應一念後
果得涅槃者	我等咸歸命		

鴉聲

やみのよに、なかんからすの、こゑさけば、

父かとぞおもふ、母かとぞおもふ

我幼き時より悲しげなる鴉の聲を聴くごとに無常の感に打たれて腸をちぎらるるの想あり、「一切の衆生はみなもて世々生々の父母兄弟なり」先き立ちたまへる父、老みませる母、古來の聖賢、全國の同信の方々忽にして我側に集ひたまふ、而して遂に一名號海中に融會したまひて、過去なく、未來なく、

感謝

旅の暮

昨夜會津城頭に眺めたる暮の明星を、今夕は上州の曠原に眺め、明夜は千曲川の畔に眺めむ、既に前月に高松丸龜岡山大坂に法を説き、今月は甲州若松上田飯山に大悲を仰ぐ。首を回らせば七年已前父母を奉じて善光寺に參詣したる時通れるの道、前橋や、安中や、皆是れ嘗て法を説き、我か御同朋のあるの地、嗚呼悠久なる天地、變りなき山川、獨り歲月は吾人を促して人生の常なきを觀せしむ。嗚呼天地宇宙の間、唯一の南無阿彌陀佛のみ吾人が抱かる、聖懷にして亦永遠の樂郷なる哉、南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。

曉起所感

忽爾夢破れて、身は山寺孤堂に在り、歌々として往を懷ひ、來を想ふ、誰が家の勞働か藁を打つの聲山下に響き、寺男既に起きて太鼓を叩く、我跪坐して殘燈を挑げて筆硯に對す、

生なく、死なく、而して遂に我寂しき心なし。嗚呼鴉は我が爲に善知識なるかな。

善光寺

善光寺は日本佛教の聖殿なるのみならず、我一生に於ける心靈界の聖殿なり、我故郷の習慣として此聖地を踏むを以て一代の樂となす、我學窓に在るの日父母生存の中、其樂を捧げんと欲し幾たび涙を注ぎしかを知らず、遂に果さず、業卒へて後、西遊に臨みて始めて其志に報あるを得たりき、我同盟會組織の爲に全國に巡遊せし時此地に詣せしこと二回、求道會を肇めしより今年に至るまで四年間、年々夏期宿縁ありて信州飯山地方の修養會に臨む、而して往復此地を過ぎる毎に禮拜せざるなし、嗚呼何ぞ多幸なる、或は霜を踏み曉の勤行に詣して籠前に恭敬禮拜せしことあり、或は堂前に跪きて塵中土間に頭を埋めて敬虔涙を垂れしことあり、或は秋草を捧げて微かなる心を投ぜしことあり、或は車窓堂屋を望みて合掌默禮せしことあり、而して年々必ず新たなる記憶の存するを見る、或は祖母を追吊し、或は父を吊し、昨年の如き恰も此地を拜して過ぎつゝあるの日恰も從弟は北韓葛布岑に戰死す、而し

我歳きはまりて、安養淨土へ還歸すといへども、和歌の浦の片雄浪のよせかけ、歸らんに同じ、一人居て喜ばゞ二人とおもふべし、二人寄りて喜ばゞ三人と思ふべし、其一人は親鸞なり、

我なくと法は盡まじ和歌の浦、あをくさ人のあらんかぎり

弘長二歳十一月

愚禿 親鸞

満九十歳

であります。此二つの御文を私は華園文庫でよみました、たしかな書物に出てる譯でありませぬ故聖人の著作であるとは断言出来ませぬ、唯味は、せていたゞ喜ばせてもらふだけである。又例へ此書が確なりといつても、あまりに簡單である故に、法語としては此法爾章が最後である様です。

私はおもひますに釋尊は最後に涅槃經を説かれましたが、此文は親鸞聖人の涅槃經の如しとおもひます。即ち釋尊は拔陀河の畔に於て將に涅槃の雲に入らんとしたまふ時、阿難を呼びて、「如來常住無有變易云々」といふ涅槃經を説きて入滅された、されば此章は聖人の九十年の一代に於ける文字に顯はれたる涅槃經とも云ふべきであります。

全體私は聖人の書物を見るにつきて、——既に斯く云ふも計らひですが——私は聖人の思想の變化なきに驚ろさます。無論信仰に變化のある筈はありませぬが、然し如何にも其思想に變化のなきに驚ろさます。

即ち八十六歳に於ける未燈鈔の自然法爾も八十八歳に於ける法爾章の思想も少しも變つて居りませぬ。されば八十八歳

誓願を離れたる名號も候はず、名號を離れたる誓願も候はず、かく申し候も計らひにて候也。たゞ本願を不思議と信じ、又名號を不思議と一念信じとなへつるうへは何條我が計らひを出すべき、聞きわけ知りわくるなど煩はしく仰せられ候やらん、これ皆ひがごとにて候なり。唯不思議と信じつるうへは兎角の御計ひあるべからず候。往生の業には私の計ひあるまじく候なり。穴賢々々、唯如來に任せ參らせまはしますべく候、あなかしこ。

是れ亦自己の計ひがなくなつて佛陀の御計ひに一任するが極致であるといふ仰せてある、即ち義無きを義とするいふのであります。偕て此の義なきを義とすとは何うかといふに、義といふ計はひである。人間の計ひを無くするのが義無きを義とするのであると『未燈鈔』に於てお示なされてある。即ち一切我等凡夫の計ひを離れて全く佛陀の御計ひに任かせるのが無義之義の要點であります。而して初にも申せし如く此思想が聖人晩年の教化の特色をなして居るのであります。

茲に私の最も驚ろく處は、此无義の義といふ言葉は今も申す如く聖人の晩年になつて出て居るが、其意味は既に教行信證にあらはれて居る事でありませぬ。しかし無論教行信證全體が彌陀の本願に任せよといふ事故、其教行信證中に无義の意味が出て居ることは別に不思議でもないが、俗語の「計らふ」といふ言葉までが出て居るのであります。即ち『行』の巻に於て歸命を釋した處で宜く、

歸の言は至なり、また歸説なり、説の字は悦の音、また歸説なり、説の字は税の音、悦税ふたつの音告なり、述なり、

御筆の此章を聖人の御遺誠と見ても些かも差支ないと思ふ。

殊に此點に於て味のあつたのは教行信證と和讃とであります。聖人の五十二より五十九歳の間にて著されたのが教行信證と和讃は其後教行信證と同一の味を詠ぜられたものである。

處て教行信證にない味を和讃で詠じてあることは殆どない。全體聖人の信仰より云ふ時は二十九歳の御入信の時より三十五歳の流罪、五十二歳教行信證を著された時も八十八歳此章を書かれた時も思想や味は毫も變つて居ない。唯茲に著しい事は教行信證には「義なきを義とす」といふ語がない事です。或は漢文で書きあらはし難くい爲かもしれませぬ。處が晩年に於ては、此言語が殆んど口癖の様に居るのであります。

華園文庫の中に、聖人の御娘子、彌女様の言葉が出て居ります。其中にも「義なきを義とす、何事も佛に任せよといふのが、師父聖人の御教化である云云」といふ意味の文もありません。又聖人より一年後れて入滅されし御夫人玉日君の御遺狀にも親鸞の仰せも外の事は候はず、計らはず只、稱名喜ぶばかりに候とあります。

又未燈鈔に出てある聖人晩年の御文にも、「たゞ計らはず佛陀に任せよ、法然聖人も義なきを義とせよといはれた」といふ意味が度々出て居ります。

即ち此義なきを義とせよといふ言葉は親鸞聖人晩年の特色である。尙ほ一例を申せば嘆異鈔の中にも誓願不思議、名號不思議といふことがありますが又未燈鈔の内には誓願名號同一の事といふ手紙があります。曰く

ひとのこゝろをのべのぶるなり、命の言は業なり招引なり、致なり道なり、信なり計なり、召なり、こゝをもて歸命は本願招喚の勅命なり。

とあります。既に此時に計といふ文字が顯はれてあるのです。これを以て見れば、聖人の無義の義の思想の淵源は非常に遠いといふことがわかる。即ち聖人の歎びに於ては二十九歳入信當時より九十歳入滅の時に至るまで何等の變化もないのであるが六十歳の御頃此計といふ語が出てきて、晩年になればなるほど益此思想が激しくなつて居るのである。今日は此章を拜讀して聖人の信仰の眞髓を話さうと思ひます。

偕此章は何をかゝれたものかといふに、深く考ふるまでもなく、聖人の喜そのまゝが顯はれたものである、夫である故、これに料文段落を附けるのは聖人の本意でない故やめませぬ。

然しながら自然の間に大体の順序は立つて居る、聖人一代の御教化は皆含まれて居るのであります。しかし此事は後に話すと致しまして、抑、私が未燈鈔のとらざる此章をとりて講話をするといふのは、此章には始めに獲得名號といふ事があり、又終りに和讃が附いてある故此方が完全であるとおもつたからです。獲得名號——私は如何も此意味が久しい間わかりませんでした、三年程前より漸く此味を解らせてもらひ夫より漸々と法爾章も明了にしてもらつたのです。一体眞宗には昔から此等法語の講釋の筆記があるのですが、私は横着にもそれを見なかつたのである。寧ろぶつゝけに聖人の御言葉喜びばせて貰つて居たのです。なぜならば、信仰で書かれたものゆゑ、又信仰でよんだら大過はないだらうとおもつたからで

あります。一体真宗に於ては教行信證の如きは、容易に讀ま
せないのでありますけれども聖人に於ては、御息女、彌女様
に此延書が渡してよませてあります。彌女様の御消息に曰く、
「師父聖人かねて、御紀念にのこし下しおかれ候廣文類の
御伸書誠に辱なく、披き奉るたび毎に身の嬉しさ、心の涼
しさ」。

とあります。これを以て見れば、一般に此書は拜讀するに差
支へないと存じます。私はさうもつて頻りに拜讀させて頂
きました。又自然法爾章の如きも先輩の講釋は數多あります
が、私の手許に其れがない。又圖書館に行くまでもないとい
もひ拜讀しなかつたのである。處が此間夏期講習會に於て南
條博士が此講釋をもつてきて私に見せて下さいました。之を
拜讀して行きます。先づ大体に於ては大差はありません。む
しろ或點に於ては先輩の所説はよほど、學解に涉つて居る様
てあります。

偕愈本文にかゝります。始めに獲の字を釋して「獲の字は
因位の時得るを獲といふ、得の字は果位の時に至りて得るこ
とを得といふ、名の字は因位の時の名を名といふ、號の字は
果位の時の名を號といふ。」とあります。一体此獲得名號とい
ふことを因と果とに分けるといふ様なやり方は、どこに據所
があるか、これ第一の疑問であります。處が今でも之は分明
にわからぬ。しかし、私は聖人が信仰の立脚地よりかくいは
れたものと存じます。

私は嘗つて聖人の訓話註釋に對して——たとへば先にあり
し歸命の字訓の如き——皆聖人の信仰の眼より縦横無盡に思

捨せられたるにもせよ、又一切經中の如來をすべて阿彌陀如
來とし、佛とあればすべて阿彌陀佛とせられたるにもせよ、又
名號とあれば皆南無阿彌陀佛とせられたにせよ、皆聖人はこ
れが眞實これより外にないと思つていはれたのである。我等
ならばこれは奇抜といひたい處をも一々字引に引合せて正直
に素直にやられたのである。之に依つて考へて見るに聖人が
法然聖人について始めて他力宗を開かれたときも、全く選擇
集の「南無阿彌陀佛、往生之業、念佛爲本」の其儘を受けら
れたのであります。歎異鈔にも、「念佛より外に往生の道をも
存知し、法文等をも知りたるらんと心に、思し召して在し
まして侍らんは大きな誤なり親鸞に於ては唯念佛して彌陀
を助けられまゐらすべし」とよきひとの仰を蒙りて信する外に
別の仔細なきなり」とある。我々時々横着の語氣の顯はれる
のは實に慚愧に堪へぬのであります。

偕すべて如此くなれば、此獲得名號に於ても必ず確かな
據處があるらしくおもはれるのである。私はもしや憬興師の
述文讀に據られたものでないかとおもひます。

南條師より拜借致した其講釋書に先輩の説が二つある。一
つは聖人が自身に思ひ附かれた者とする説と一つは俱舍論に

得有三二種、一者未得已失今獲二者得已不成就
といふ文がある、是れによられたものでないかといふ説であ
ります。次に又名といふは法藏比丘の時の名、號といふは阿
彌陀佛の時の名であるといふ説もあります。然し私は俱舍論
によられたとは如何してもおもはれぬ。私は述文讀の中にあ
るのでは無いかともおもひます。

ひきつて註釋された者と信じて居ました。無論夫に違ひはな
いが今より見れば夫ばかりではなく、凡て他により所なくし
て一字一句と雖も苟もしてないのであります。其より所の方
面に注意して居らなかつたのは私の大に懺悔する所である。

聖人は廣韻といふ字引、憬興師の述文讀とに大いに據られた
者のらしい、殊に此述文讀は大經を釋せられた者であつて聖人
の特に愛讀された者であります。夫て聖人は此讀のやり方に
ならつて字訓釋等はやられたものらしい。そこで聖人は信仰
であるからとて決してむやみな事はなされてない。無論信仰
を離れてあるのではないが、引用書等は充分用意してやつて
あられた事を私は漸々發見してきます。實に貴むべき事であ
ります。即ち彼の「外に賢善精進の相を現するを得ざれ、内に
虛假を懷けばなり」の文の如きも徒らに點をうちなほして「賢
こい相をするなり」といはれたのでない。無論信仰からではあ
るが、信仰ばかりでさういはれたのではない、當時慧心流と
て其様に點を打かへて讀む流が行はれてあつたのである。聖
人は即ち當時の解釋法によりて釋されたので決して無法に、
たゞ信仰がかうだからといふてやられたのではない。私共は
動もすると語氣が信仰だからかくやつてもかまはないといふ
風に出て困る、これは大に謹しむべき點であります。ことに
聖人の性質の最もよく見えるのは、淺草坂東報恩寺秘藏の御
肉筆の教行信證であります。これを拜するに一字一劃も亂れ
がない。私共は無茶苦茶に書きますが大に謹しまねばならぬ
と思ひます。聖人はかくしかと據所ありて活用して居られる
のである。聖人はすべて如此し。乃至大經の文を報土化土と取

次に、此一節の意味の見方に於ては先輩のあまり私は感
じません。獲得とは信樂を得る名號を得るといふ意味だらう
とおもひます。信の卷の別序には「信樂を獲得することは如
來選擇の願心より發起す」とあります。此意味であります。
名號を獲得するとは如何かといふに、名號を心に戴き又口に
戴くことである。「獲の字は因位の時得るを獲といふ、……」
これを引くるめて曰へば、我々が信樂を獲得するも、名號を
獲得するも皆、佛陀因位果上の御苦勞の御力であるといふ事
だらうとおもひます。猶ほ進めて申せば、——こゝ迄言へば
或はこじつけになるかも知れぬが——親鸞聖人は「行」の卷に
於て述文讀の文を引いて云はれたには、如來の廣説に二つあ
る、一つには如來淨土の因果すなはち所行、所成を説き、一
つは衆生往生の因果すなはち所攝所益を顯すといふてある。

これを以て推しますと、衆生往生の因果は何から來るかといふに、
如來が本願を起し如來淨土の因果が成り立ちて始めて
出て來るのである。故に此意味に於て聖人が用ひられたもの
だらうとおもはれる。聖人一代の信仰の要點は本願に極まつ
てしまふ、而して聖人が本願をいはれる源が法然聖人にな
かといふに既に選擇、本願念佛集といふのであります。南無阿
彌陀佛の出來たのも我々が信仰を得る事が出來るのも皆此本
願より來るのであります。歎異鈔の始に於て聖人曰く、彌陀
の誓願不思議に助けられまゐらせてとあります。又其他の聖
教に於ても到處に本願の文字が用ゐられて居る。私は始の頃
は本願といふ文字よりも慈悲といふ文字を用て居りました。
夫は今迄の説教などに餘りに本願のみを説いて來た者ゆゑ御

慈悲といはねば人が感動出来ぬ様になつて居たからである。しかし今では又本願といふ方があり難い様に思ふ。一体歸命の如きも本來は我々が佛に對しする意味である、然るに聖人は是を「本願招喚の勅命なり」として、佛よりすがれとある勅命あるが故にすがるのであるとせられた。故に南無(歸命)阿彌陀佛亦全体が佛力となるのである、至心、信樂、欲生の三心も本來は我々が佛に對したてまつる語であるが、聖人は是等をも前の如くすべて佛力といはれた。何故かといふに我々は實に淺ましい人間で慈悲もなく信すらも起しぬ者である、さればこそ佛は我々に與へんが爲に不可思議兆載永劫の御苦勞をして下さつた、其間一念一刹那も清淨眞實でなかつたことはない、其の大悲心の塊の眞實を我々に廻向して下さるのである。此の本願大慈悲をこの因位果上の事實を以つて我等に示めされたのであります。實に私は今にして聖人の本願と云はるゝ事のありがたひ事がわかつてきました。實に因位果上の本願をはなれては佛のありがたひことがとけなないのである。茲へくると蓮如上人の御一代の化導がよくわかつて下さるのである。上人は御文に於て曰はく、

阿彌陀如來の仰せられけるやうは末代の凡夫罪業の我等たらんもの、罪はいかほどふかくとも我を一心に頼まん衆生をば必ず救ふべしと仰せられたり、

と、最もわかりやすくいはれてある。蓮如上人は教行信證を五度表紙の切れるまでに讀みやぶられた。其程讀みやぶつた活眼を以て「阿彌陀如來の仰せられける様は」とかゝれたのである、是は非常に味の存する事ともひます。即ち佛の因位

果上の誓願が聖人の要點で、夫が蓮如上人になれば「歸命は阿彌陀佛よりのめ」となるのであります。慈悲、力といふも此因位果上からあらはれてくるのです。我々が御慈悲を喜ぶ上にしても随分求むる時は苦しむが、此苦は決していらぬ事を苦しんで居たのではなく、苦勞したから漸くわかつたのである、めぐみは苦勞なしに物のくる様にわかる筈はない。苦悶の極我々が始めて御慈悲がわかつた時、「あゝ五劫兆載永劫の念力、願力の御力であつた、此佛の因位果上の御めぐみにすくはれたのであつた」と氣附くのである。けれども、さては容易にわからぬのであります。

そこで獲得名號といふは、我々が名號を獲得するのではなくして佛の五劫思惟、兆載永劫の御苦勞で得させてもらへるのです。和讃にも

「兆載永劫の修行は、阿彌陀の三字におさまれり、五劫思惟の名號は、五濁の我等に附屬せり。」

とあります。かゝる願力、かゝる佛の慈悲によつて、其佛のめぐみのちから名號を得させてもらふの故獲得名號といはれたのであります。

次に自然法爾、これがまた何處により、所があるか、又何故こゝにこれをいはれたか、わからぬ。しかし私は此自然といふのは確に大經の「自然の牽く處なり」といふ處から出たものともひます。先輩は大經に於て自然といふ字の數をかぞへて、五十いくつあるといひ、其内三十は業力に關し、其の他は佛力に關していふてある等ともいはれてあります。しかし此自然はたしかに佛の廣大なる力をあらはす自然であります。

す。述文讀には

聖國妙えなり、誰か力を盡さいらん、善を作して生を願ぜよ、善に因て既に成り給へり、自ら果を獲ず、故に自然と云ふ、貴賤を簡はず、皆往生を得しむ、故に著無上下と云ふとあります

そも普通に自然といふは葉青く風かをり、水が流れる、といふ様に宇宙自然の現象に用ゐられて居るのであります。又大經にも自然の徳風などといふ事もあるのです。これもたしかに自然は自然であるが、聖人の自然といふは此れてもなく、又業力をあらはす自然でもありません。佛の本願力をあらはされたものであります。

自然といふは自はちのづからといふ、行者の計らひにあらず然らしむといふことばなり、………法爾といふは、如來の御力なるがゆゑにしからしむるを法爾と云ふ。

此文章はぐるぐるとまはつて、何處が始めとも終りともつかぬ文です。而して此の要點は自ら助かりたい、念佛申してたすからうなど、一點の計らひをも交ふべからずといふのであります。末燈鈔には、法爾といふは法の徳の故に然らしむるを法爾といふともあります。今日の信仰界にいふて居る自然といふ言葉は、天地が自然法爾に我を愛するならずやなどといふ極めて力なき自然になつて居る。かくの如く一般に力なき處に用ゐらるゝ自然法爾をば聖人は最も力強く解釋せられたのである。聖人の意では自然法爾とはひとりてといふ事である。ひとりてに物事があるといふは、大なる力が常に其

物をひいて居るからである、といふ様に極力強きものとせられたのであります。花が咲き、花が萎む、是れ矢張り法爾であるが、聖人のいはれたる處ではない。聖人のいはれる法爾とは、我々如き悪人が佛になれるといふは法の力なる御力が然らしむる故にゆけるのであるといふ極めて強き法爾であります。

偕て其次に

此の法爾は御誓なりけるゆゑに、すべて行者の計らひなきを以つて、此故に他力には義なきを義とすとするべきなり。義なきを義とすといふのは、法然聖人も度々いはれた處であります。聖人の和讃には

聖道門の人はみな、 自力の信をむねとして、 佛智不思議に入りぬれば、 義なきを義とすと信知せり。

今迄聖道門の理屈ばかり學んで居た人が一度他力の信仰に入りますと何の理もなく唯不思議であると信するのであります。即義なきを義とすとは不思議が不思議とわかることである。五劫兆載の苦勞などは何程哲學などで考へたつて如何してもわからぬ。其御苦勞は自然法爾に本願の力のしからしむる處であると信する處でわかつてくる様になるのです。

次は

自然といふはもとよりしからしむるといふ言葉なり、彌陀佛の御誓のもとより行者の計らひに非ずして、南無阿彌陀佛とたのませたまひて

實は我等は南無阿彌陀佛ともいへぬものであるが、佛の方よりたのませたまひたのである。

——迎へんと計らはせたまひたるによりて、行者のよからんとも、あしからんともあまはぬを自然とは申すぞとさへ候。

こゝが此章の要所で、佛陀の御計らひが我等の胸に至り届く處であります。一言しますが、茲に善からぬとも悪しからぬともあるを以て直に禪宗等ていふ善し悪しを超越する事と誤解してはならぬのです。聖人が善し悪しをちもふたと仰せられたは何も我々が善惡を離れて居ると言はれたのでは無し。一體我々は本來罪惡の者なのである。例へば佛陀を頼むと言つても既に悪い、さらばといつて佛陀と隔をつけてもいかぬ。又惡をたすけてくださる佛だからといふて御法にならずんでもいかぬ。親が子にたくさんくれるからといふて、子がむやみに使ふのはいけないのです。我々は徹頭徹尾惡である。其罪惡の私を助けんとする御慈悲より佛陀の因位果上の本願が出来たのである。我々は惡をも捨てぬ御めぐみとさくとなり、自ら自分の惡を御めぐみの力の大なる爲に離れる事が出来るのであります。親鸞聖人が善惡をはなれると仰せられたのはこれである。次に

誓の様は無上佛にならしめんとちかひたまへるなり、无上佛とまうすは形もなくまします、形もましまさぬゆゑに自然とまうすなり、

今の世の人は信仰を求むるに先づ佛とは何ぞやといふ事に首をつつこむ。そして佛は眞如であるとか、宇宙の本體であるとか云ひ度がるのである。そして此處は度々其證據に出されるのであります。

いかぬのである。我々は信の一念に於て既に其心は淨土にゆき肉體が去つて初めて形もなき無上佛にならせて貰ふのである。もし形があれば、涅槃といふ事は出来ぬのです。釋尊は三十五歳にして成道なされ、八十歳にして御涅槃に入りました。此御入滅の時に我はまさに涅槃に入ると雖も如來は常住にして變易ある事が無いと説きなされてある。又親鸞聖人は阿彌陀佛の本願を信じて佛の御力によつて無爲の涅槃に行くとも仰せられた。共に同一の味を示されたものであります。其處で『證』の巻には此味を最も明了に示されてあるのであります。曰く

煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群崩、往相廻向の心行を獲れば即の時に大乘正定聚の數に入る。正定聚に住するが故に必ず滅度に至る、必至滅度は即ち是れ常樂なり。常樂は即ち是れ畢竟寂滅、寂滅は即ち是れ無上涅槃、無上涅槃は即ち是れ無爲法身、無爲法身は即ち是れ實相、實相は即ち是れ法性、法性は即ち是れ眞如、眞如は即ち是れ一如、然れば彌陀如來如より來生して報應化種々の身を示現し給ふなり。

眞如といひ實相といひ無爲法身といふは凡て我々が廣大なる往相の廻向の御力で將に到らせて貰ふべき佛陀の境である。而して此の廣大の境よりして我々を救はんが爲めに顯はれて下されたが阿彌陀佛なり釋尊なりであります。之が即ち自然なのであります。然るに世人は動もすると此の無上佛、無爲法身の境を以て直に我々の信ずべき佛陀、信仰の對象と爲たがる、之は大なる間違であります。我々が信仰の對象となつて下さる佛陀、即ち我々が今日御慈悲に氣附く迄我々を導

形ましますとしめすときは無上涅槃とは申さず、形ましますぬ様をしらせんとて始めに彌陀佛ぞと聞きならひて候。彌陀佛は自然のやうをしらせんれうなり、此道理をこゝろをつる上には、この自然のことは常に沙汰すべきにあらずるなり、常に自然を沙汰せば、義なきを義とすといふことは、なほ義のあるべし。

これは佛智の不思議にてあるなり。

これは極簡單にいふとちもひます。無上佛とは形もなくまします。我々が淨土に生るゝ時かくのごとくあるだらうなどとちかひたまへるなり。我々が佛陀に救はれた結果、我々が無上佛になるのです。其我々のなる佛陀は無上佛で形もなし、所謂虚無の身無極の體である。又善導大師は極樂無爲涅槃界といはれてあります。又善導大師の

西方無爲の都には畢竟逍遙にして有爲をはなれたり。大悲心に蓋じて法界にあそぶ。分身してものを利すること等しくして異なる事無し。或は神通を現して而も法を説き、或は相好を現じて而も法を説き、或は相好を現して無餘に入る。變現の莊嚴こゝろにしたがひて出づ。群生見るもの罪皆のぞくる。又贊じて曰く、いざいなん、魔郷には止る可らず、曠劫よりこのかた六道に流轉して悉く皆經たり。到る處に餘の樂なし、唯愁歎の聲をさく、この生平を了へて後かの涅槃の城に入らん。

といふ御文もあります。此自然は無爲の自然即ち淨土の悟りであります。然るに之れを我々が信ずる佛としてしまふのは、深く留意して頂き度いと思ひます。

更に進みて申せば華嚴經涅槃經等に顯はれたる廣大の佛境も總て此の無上佛の境を書かれた者であります。而して其廣大の境に導いて下さるが即ち佛陀此の世に出興し給ひし所以、否阿彌陀佛の本願を起させられた所以であります。此の阿彌陀佛は何處より顯はれさせられたか、即今云ふか如く無爲法身の廣大境より來生せられた。而して此の阿彌陀佛は先程より言ふ如く因位果上の御力で我々を導いて下さる。我々は「行者の善からんと惡しからんと思はず」一切の我が計ひを用ゐずして此の御力の故に自然に無上佛の廣大なる境に入らせて貰ふのであります。彌陀佛は自然のやうを知らせられうなり。此の廣大の境に到達せしめんが爲に顯はせられたが阿彌陀佛であるといふ仰であります。

偕て已上に於て手短なる御文の中にすつきり一代佛教の要義を最後の大涅槃迄同ふ事か出来た。此上は如何かと言ふに此の道理を心得つる後は、此の自然の事は常に沙汰すべきにあらず、常に自然を沙汰せば義なきを義とすといふ事は、猶ほ義のあるべし。之は佛智の不思議にてあるなり。と仰せられてあるのです。又和讃に於て宣はく

如來すなはち涅槃なり 涅槃を佛性とまつけたり

凡地にしてはさとられず 安養にいたりて證すべし。

我々は茲迄は言ふ事出来るか此の已上を言ふといかぬ。聖人の御本意は佛智の不可思議は彼土に往生して初めて解らせて

貰ふのである。此の土に在る間は凡夫の分際を以て彼是れ言はる可き者では無い、又彼是れ言つた處で到底解る筈は無いのであると、かういふ御本意なのであります。私も今日は思はず深入して話させて頂きましたのである、既に茲迄知つた上は此事は此上あまりに沙汰するのは能く無いのであります。若し此上沙汰するとなれば、佛智の御計ひに任すと謂ひながら猶ほ夫れに計ひを着くる事になり義無きを義とすと謂ふ事は猶ほ義のある事になるのです。誠に勿體なき次第であります。初めに申した未燈鈔の誓願名號の御文に於ても誓願を離れたる名號も候はず、名號を離れたる誓願も候はず、斯く申候も計ひ也、唯誓願を不思議と信じ、亦名號を不思議と一念信じ稱へつる上は、何條わが計を出すべし、聞きわけ知りわくるなど煩はしく仰せられ候やらん、是れ皆ひがごとにて候也、唯不思議と信じつる上は兎角の御計ひある可らず候

と申されてある。唯不思議々々々、名號不思議誓願不思議、此の外に何等の言をも挿むべき餘地も無い。まことに有り難き御文であります。夫故聖人の著書を拜讀して行きますに、佛陀の因位果上の慈悲の塊で極樂の證を開かせて貰ふと迄は仰せられてあるが其已上は決して仰せられて無いのであります。何うも聖人の一言一行總て信仰の極所を闡明し居られるのであります。

さて此章は聖人御自身では左程の深い思召で書かれたものとも思はれませぬが、自然の裡に教行信證が包括せられてあるのです。夫は何うかと言ふに獲得は即ち信樂獲得にて「信」

生は随分物の解る積りて居りますが、併し眞實の處は何うかといふに誰しも解かつて居無いのである。我々は孰れが正て何れが邪であるか、自分に辨別つかぬ哀の者なのであります。「小慈小悲もなければ、名利に人師をこのむなり」其上少しでも慈悲の心があるかといふに、全く其俤だにも無い。かゝる哀れなる分際を以て而も猶ほ名利の心から人の師匠顔を仕度がつて居る、何處迄とも測り知られぬ恐しき私共の心であります。たとへ人に對して信仰を話すにしても矢張り名利心である、我々は名利を離れては一步も踏み出す事の出来ぬ身上なのであります。聖人の『愚禿鈔』には亦次の如き言葉もあ

ります。
賢者の信を聞いて、愚禿が心を顯はす、賢者の信は、内は賢にして外は愚なり、愚禿の心は、内は愚にして外は賢なり。

此の御意は親鸞日頃小慈小悲もなき身を以て如何にも賢者の風を装ひ、人に對し信仰を語り、又妄りに慈悲など、言つて居る、如何にも淺ましい事であるといふ深刻なる御懺悔であります。更に亦述懐の和讃に於ては

小慈小悲も無き身に、有情利益はあもふまじ、
如來の願船いままさずば 苦海をいかで渡るべき、
矢張り同じ御意であります。我々に一切の慈悲なく又一切の光明なし、唯佛陀の御力のあはするのみであります。何處迄も話しても要するに此の二種の和讃を離れる事は出来ませぬ。

偕て随分時間も移りましたから今日は是丈けにして置から

に當り、因位の大行にて出来揚りたる南無阿彌陀佛は即ち「行」である。又「誓ひのやうは無上佛にならしめん」とあるは即ち「證」に相當するのであります。而して此の无上佛の證の境たるや、前にも申したるが如くて彌陀佛を始め報應化種々の諸佛の來生し給ふ處、亦我々も一度び誓願力の故に此境に往生させて頂いた上に於ては所謂

蓮華藏世界に至るを得れば、即ち眞如法性の身を證し、煩惱の林に遊びて神通を現じ、生死の園に入つて應化を示すと、思ふさまに衆生を化益する事が出来るのであります。

最後に二首の和讃は何うかと言ふに、之は初の部分にある「行者のよからんとも悪しからぬとも思はぬ」といふ聖人の實感を告白せられたものであります。

善し惡しの文字も知らぬ人は皆な、まことの心なりけるを、善惡の字知りかほは、おぼそらことのかたぢなり。

善からぬとも悪しからぬとも思はぬは信を頂いた姿である。實際如何に惡と言つても我以上の惡は無く亦何程善と言つても佛陀已上の善は無い。此の外にまた何事があるか、善といひ惡といふ文字すらも不必要なのであります。此が眞實のまことの心の有様であるのです。

是非知らぬ邪正もわかぬこの身なり、小慈小悲も無けれど、名利に人師をこのむなり。

『執持鈔』の第二章に「歎異鈔」の第二章と全く同意味の事を書いてあります、其の冒頭が矢張り之と同一の文字で始められてあります。是非知らぬ邪正もわかぬ此身なりとて、我々は平

と思ひます。幾度繰り反しても同じ事ですが私は如何にも此の自然法爾章を難有く頂きます。誰が如何程證の境を言ふとしても人間の力では到底此の已上を言ふ事は出来ませぬ。殊に近頃の人の最も誤り易い眞如法性、無爲法身の境を明に佛陀の御導きによりて我々の生る可き境と御示し下されたのは時節適切に感ずる次第です。云ふ迄もなく今日私のお話した處を以て私は決して完全であるとは思つて居りませぬ。全体聖人の文字は皆信仰で書かれたものであるから、設ひ聖人に其お積りが無いにした處、推して行けば何處迄も推す事が出来るのであります。

願誓申上げられ候、一念發起のところに罪みな消滅して、正定聚不退のくらゐに定まると、御文に遊ばされた。しかるに、罪は命のある間罪もあるべしと仰せ候御文と別にきこえ申候やと、申上げ候時、仰に。一念のところに罪皆消えてあるは、一念の信力にて往生さだまる時は、罪はさほりともならず、去れば無き分なり。命の婆娑にあらんかぎり、罪はつきざるなり、願誓はばや、悟りて罪はなきかや、聖教には一念のところに罪消えてあるなり、と仰られ候。罪のあるなしの沙汰をせんよりは信心をとりたるか、とらざるかの沙汰を幾度も。よし罪きえて御助あらんとも、罪きえずして御助あるべしとも、彌陀の御はからひなり、我としてはからふべからず、たい信心肝要なりと、呉々も仰せられ候なり。

（蓮如上人御一代聞書）

聖傳

ジャータカ釋尊傳

六 歸省

佛陀竹園に住み給ふ時王スドホーダナは彼の太子の六年間の苦行に堪へて今や大覺を成し、ラージャガハに近き竹園に住せるを聞きぬ。王或一人の臣を召して曰く、「汝千人の從者を具してラージャガハに到り我名に於て云ふべし、汝の父王スドホーダナ汝を見んと欲すと、而して彼を連れ來れよ」と。

臣恭しく「唯々也大王」と勅命を受けたてまつり六十リグの遠きに至れり。而して主の大衆に打まぢりて説教の時ウイハーラ(僧院)に入りぬ。おもへらく「我をして王命を暫く待たしめよ」と、彼大衆の後に立ちて教に耳傾けしが遂に一行を擧げて阿羅漢果を證しぬ。臣世尊に申して曰く「我を弟子たらしめたまへ」と、大聖御手を差し伸べて、「我等の中來れよ、比丘等よ」と宣ふや、彼等各百歳も経たらん長老の如く、奇蹟によりて造られたる衣服と鐵鉢もて立ちぬ。

彼等、かく阿羅漢果を得たる上は世の者に非ず、遂に彼等王命を世尊に傳へずして終りき。王、臣の歸り來ず、又何等の消息もなきを以て、漸く怪しみたまへり。乃ち他の臣を以前の如く召し送りぬ。彼亦前人

の如く阿羅漢果を得て歸り來らず、かくして九度に及びしも彼等すべて無言に終りき。王何人も歸り來らざるを憂ひ、誰をして我命を傳へしめんやと歎じたり。此時王、カーラウダインの萬事王に忠實にして最も信任厚きが上に、世尊と同日に誕生し主の遊仲間なるをおもひいだしぬ。曰く「友なるカーラウダイン、我わが太子を迎んと欲して九度使者を送りしも香として聲なし、而して今や我命旦夕に逼れり、我切に我生前に太子に見えんと欲す、汝我をして太子に見ゆるを得しむるや」と。

ウダイン答へけるは、「大王、もし我出家しあともべくば我能はん」と、我友出家たるも、出家たらざるも、汝が意の欲する處に従へ、たゞ我をして我息子を見せしめよ」と、彼唯々也大王」と使命を畏こみラージャガハに行きぬ。彼世尊の教訓の時來るや、亦大衆の片端に立ちて佛陀の德音をき、從者と共に阿羅漢果を證し弟子となれり。主はイシバタナに佛果を得たまひしより四十日餘を過したまひて後ウルベラにゆき三月間止り、カツサバの壘を征服したまひしなり。而して一月の満月の夜千人の隠士等と共にラージャガハに行き其處に二ヶ月住したまへり。かくして君はベナレスを出て立ちたまひてより、五月は經にけり。ウダインは到着以來早や七八日も空しく過ぎぬ。三月の満月に向ひてウダインおもへらく「寒き時候は過ぎ春は來る、人は收穫をあげ、旅に出てたつ、地は新らしき草に覆はる、森は花の眞盛なり、道は歩むによろし、今ぞ大聖の家族を省みたまふの時なるらし」と、ウダイン世尊に行き主

の故郷を訪はんの御心もやと、六十の解もて旅をほめうたひぬ。曰く、

木々の梢は、かくはしき花のみさかり、果をたづぬ人には蔭もなきまで燃ゆる炎とかじやけり。そは、あつからず、さむからず、よるづ、めてたき極なる地は濃き緑滴りて今ぞ時きぬ、みほとけよ。

主のたまはく、「やよウダイン、汝は旅の快樂をかゝる麗はしき聲もて歌ふや?」「我君!」と答へぬ。「君の父王今一度君に見えんと思ひ煩らひたまへり。君御一族を省みたまふや、いかに?」「よくぞいひたる、ウダイン! 我行かん、大衆に旅出の用意命ずべし」と。

カーラウダイン乃ち兄弟等に告げぬ。而して大聖は清淨なる一万二千の比丘と打連れてラージャガハを出てたちたまへり、一日に一リグの行程もてゆるやかにカピラにむかひ旅したまへり。長老、「我王をして世尊の來たり給ひしを知らしめん」と空に立ち王家にあらはれぬ。

王ウダインを喜び請じて華麗なる座につかしめ美味佳肴を以て満てる鉢を與へぬ。其時長老立ち上りて去らんとせり。王「座して食せよ」と叫びぬ、ウダイン「我主の一行にかへ

りゆきて後又食せん」と答へぬ。「あ、主は今何處にかいます?」「主は旅しつ、一万二千の大衆と共に父王に見えんとて來たまへり、あゝ王よ。王あさへがたき歡喜を以て曰く、汝を食せよ、我又た太子の爲に美味を用意せん」長老諾しぬ。王は彼に給仕せり。やがて鉢は香よきチヌーナムもて清められ、最上の食物は満たされぬ。王長老の手に食器を「佛陀に捧げまつれ」といひて置きぬ。さればウダイン衆の目前に於て鉢を空中に投げ自ら空に上り再び其を取りて主の御手に捧げたり。主は美味を食したまへり。かくしつ長老は日々食を持ち來しぬ。故に世尊は旅に於てすらも大王の食卓の珍味をもて身を養ひたまふを得たり。

長老ウダインは彼の食終るや毎時王につげぬ「今日世尊は此處まで來りたまへり、今日は何處まで」と、而して言語を盡して佛の高風を説き談りしかば彼世尊にまみゆる前に早や王家をして歡喜措く能はざらしめぬ。

此事を以て世尊ウダインを常に賞して宣はく、「高きかなウダイン! 我大衆の中に於て我一族を法に引入せしはカーラウダインなるぞ、比丘等よ」と。

人々、彼王の貴き親族を迎ふるの準備につき談合せしとき、佛の止りたまふ場所につき思ひぬ。彼等ニグロダ園は快き處ならんとて其處に佛を請せん事を決し、各手に手に花をもちて世尊にまみゆべく行けり。

先づ村の男女の童兒等を送り、次に貴族の若人貴姫を送りぬ。彼等はあのがじと馨り高き花とチヌーナムもて裝ひ佛の後侍りて、ニグロダ園に佛を案内し奉れり。世尊は万二千

の阿羅漢に圍繞されつゝしつらはれし玉座に着したまひぬ。そも此等サッキ等は性慍慢にして頑固なりき。されば「世尊は我等の弟、舅、子息、孫の如き若輩、敬するに足らず」とあなどりて小兒等に曰く、「汝等は彼を拜せしや、我等は汝等の後に座せん」と。世尊彼等の様を見給ふや、おもひたまはく「我親族は我を敬せず、今我彼等をして思を翻さしめん」と、彼はガンダンバ樹下に於て天使にあらはしたまひしと等しき奇蹟をみさしめたまひぬ。王これを見て曰く、

「あゝ世尊よ。汝誕生の日カーラデバラを禮すべく連れ來りしに汝の足隠者の頭に立ちぬ、我汝を禮せりき、そは第一の敬禮たり。汝又耕作の宴にジャンブ樹蔭にやすらひし時我如何に汝を掩ふ蔭の動かぬに動かされしぞ、そは第二の禮なり。今此はからざる奇蹟を見て我世尊の前に禮す、是我第三の禮たり。」

大王のかく世尊を禮し奉るを見てサッキもいかて敬ひ禮し奉らざるべき。

大聖親族に禮せしめて後空より下りたまひ玉座に着きたまへり。サッキ等亦胸やすらかに座しぬ。

折しも雷雲驟雨を注ぎぬ、濁水は皆音たて、地下に流れ去りぬ、潤はんとするものは濕を得、濡れざらんとするものは濡れざるを得、大衆悉く驚愕にみたされき。見よ、何たる奇蹟！見よ何たる不可思議ぞ！と。

師のたまはく、「今我親族の集に於て我上に驟雨下れるのみならず先にも此事は起りぬ」とて世尊嘗つてウエサントラとしての誕生につき談りたまへり。

彼等此御教をきし後主を貴び敬ひて去りぬ、されど此等の一人だも王にまれ、大臣にまれ、世尊を供養し奉らんと乞ひたてまつる者非ざりき。

次日世尊大衆に具せられつゝカピラバツを乞食したまへり、其時すら何人も主に來らず又彼の家に主を請せんともせざりき。世尊門に佇みておもひたまへり。如何に前の佛陀は彼等の故郷に托鉢したまひしや、彼等は直ちに王家にゆきたまひしや或は門毎に食を乞ひたまひしや」とて世尊、佛陀は悉く直ちに王家に至りたまはざりしを知りて、曰く、

「我亦流をくまん、然らば我弟子等亦未來に我を學び日毎の食を托鉢して専ら道を勵まん」と第一の家より始めて戸毎に乞ひつゝ進みたまへり。

若き主悉達多乞食したまふとの風聞をきつたへ市民悉く二階三階の家を開け放ちしに群集は目にうつりぬ。

貴女ラフラーの母はかなしみておもへらく「我君嘗て黄金の輿にのり貴き晴のみすがたにあなたこなた行きなれたまひぬ、其我君の其同じき市を今は御手に鉢もちて戸毎食を乞ひたまふ、頭の髪も刈りて黄衣一片を纏ひ給ふのみ、こは君に似あはしきや」貴女窓を打開きて世尊を見奉りぬ。と見る、佛陀の威貌―三十二相八十隨好もていみじすがた！市は數多の色に燦めく後光もて輝き、あたりの人々光に濕ふ。

貴女直ちに大王に告げて、「太子食を市に乞ひたまへり」とて八十の解もて「人中の獅子王」を讚美せり。曰く、

眞黒のいとこやはらかさ
旋けるみ髪はつやつやし

さよさみひたい日の如く
たかさみはなはとゝのひて
御身をめぐるみ光は
あやにかゞやく、實にも主は
人中の獅子王や。

王いたく激し、直ちに世尊の前に走せ行きて曰く、

「如何に世尊よ、我を辱めんとしたまふや、何ぞ君は乞食したまふ、乞食すともかく數多の僧の爲に食を得るは難しと知りたまはざるか」

「こは我等の慣なり王よ」

「否然らず世尊よ、抑も我家系は大皇の貴き種族也、彼等の中一人も乞食せしものは非ざるなり、」

「そは王の家系たり、されど我等は豫言者の家系たり、ジーバンカーラ、コンダンヤよりカツサバの輩に至るまで悉く然り世々の佛陀皆乞食したまへり」と。世尊市の中央に立ちて偈を發言したまへり。曰く、

立てよ、ためらふことなかれ
聖き命にならへかし、
徳に従ふ人々は
このよはさらに、のちのよも
めぐみの幸にやすむなり。

而して偈の終りし時王は第一の果を證し、次の偈をさしとしき第二の道にぞ入りける。

聖きいのちをたどれかし
つみのみちになさまよひそ

徳に従ふ人々は

このよはさらに後のよも
めぐみの幸にやすむなり。

と、大王後に佛の御教諭をきいて第三果を得たり、王死せんとするや白き天蓋の下貴き寢台に坐して阿羅漢果を證せしといふ。

王佛陀に歸依し奉りて鉢をとり世尊を宮に先導し奉れり、美味なる食―堅き或は柔らかき珍味を列ねて大衆を供養し奉りぬ。食終るや一家の婦女等悉く御前に侍り大聖を禮し奉れり、たゞラーフラーの母のみ座にあらざりき。

彼女は例へ侍女等に行きて世尊に見ゆべしと命ぜしも、己は後に止れり。曰く「もし妾些かにも世尊の御目に觸るゝ價値あらば主は自ら我に來まさん、來まさんば主を禮し奉るべし」と。

やがて佛陀は鉢を王に渡し彼の二人の主なる弟子と共に王の姫の室を訪ひたまへり。曰く「王姫は答むべきにあらずとまれ彼女は我を歡び迎へんとせるを」とて座につきたまへり。彼女直ちに主にはせよよりて御足にすがり頭をみ膝に投じおもひし如く禮し奉れり。其時王はラーフラーの母の世尊に對する満身の愛と殊勝なる心をよみして曰く、

「世尊よ、彼女は世尊の黄衣を着し給ふときくときは黄衣を纏ふ、彼女君の一日一食を取りたまふを聞くや亦同じき慣に従ふ、主の高き寢臺を廢し給ふときくや彼女亦床に撒き廣げたる藁の上に横はれり。主、花環や香膏を用ゐたまはざるをきいて亦それらを廢せり。而して彼女の親族、我等汝を氣附け

んといふとも些かも意を拂はず、いかにけなげの振舞にあら
ずや世尊よ」と。

主宣く「そは怪しむにたらず、大王よ彼女は君を保護者とし
て有し才智も成熟せり彼女の自誓して行端正なる驚くべきに
非ず、むかし彼女一人の保護者なく、才智も熟せざるに山中を
さまよひし時だにもなほ自誓せり」とてムインスプリトとし
ての彼の誕生の因縁をとき座よりたちて去りたまへり。

次日は王家に即位式あり、又家開、續いて王の太子難陀の
婚禮ありき。佛王家に入り給ひて新郎ナンダに世尊の食鉢を
運ばん事を命じたまへり。新郎立ちて佛に行きければ花嫁
ジャナバタカルヤアテ怪しみ驚ろきて叫びぬ「我主よ！何方
へ疾く行かせたまふや」と。新郎敢へて佛に鐵鉢をとりたまへ
といひ得ずして心ならずも其を運びてウイハハラに迄も行き
ぬ。世尊彼を受けて得度せしめたまへり。

第二日にラーフラの母は息子を無上に飾りて世尊に送らんと
して曰く「彼の萬二千の比丘に打雜りて行く彼比丘を見よ、
我子よ天使長ブラマの如き彼の榮光を見よ、彼は汝の父なる
ぞかし。彼世を遁れたまひしより嘗つて我等の見たることな
き大寶を有したまへり。行け我子、而して其を受け繼がん事
を乞へ「父よ我は汝の子たり、我戴冠せば全世界の王たるべ
し、我寶を要す、我に大寶を與へ給へ、如何にとならば息子
は彼の父の資産を受け繼ぐべければなり」といへ」と。

兒は世尊にゆき父の慈愛を得て打喜び、樂しげに傍に立ち
て曰く、

「あ、比丘、君のみかげは快きかな」とさまよふにふさわし

き餅を加へぬ。佛陀食を終へ感謝して座よりたち退きたまふ
や、小兒は世尊に隨從して曰く、「あ、僧よ、我につぐべきもの
を與へたまへ」「我に寶を繼がせたまへ」と、世尊を拒みたま
はざりき、共にありし大衆も亦彼を止めざりき。

ラーフラ佛陀と共に園に行きぬ。佛陀おもひたまふ様「此
富、求めらるゝ父の財は用ふれば消滅し其と共に愛を加ふ、
されば我嘗つて菩提樹下に得し阿維漢果の富を彼に與へ、以
て心靈の後繼者たらしめんにはしかじ」と、乃ちサーリビ、
ツタに曰はく「さらばサーリビ、ツタよ、ラーフラを得度
せよ」と。

ラーフラの得度されしを聞くや大王甚く悲歎せり、悲しみ
抑へ難くして大王佛に訴へ、哀求したてまつれり。曰く、「冀
くば、世尊よ、兒の父母の許なくして兒を出家たらしむる勿
れ」と、世尊諾したまへり。

次日彼王家に食終へて後座したまひしに王世尊の側に侍し
て問ひ奉りて曰く、「世尊、嘗つて苦行を修したまひし時、一
人の天使我に來りて曰く「汝の息子は死しぬ」と、然れども我
信ぜずして我太子は佛陀たらずして死すべき様なしと拒みし
が如何に」と。

佛答へたまはく、「如何に今王は信ぜんや。先に彼等王に我
骨を見せて汝の太子死しぬといひし時も王は彼等を信ぜざり
き」とて「正義の王」の因縁を説き聞かせたまへり、王即ち第
三の道果を得、信念益堅きを得たり。されば世尊心を安んじ
給ひ歸り行きてシター園に住したまへり。

此時アナーサビンジカとよべる家長五百の輜車に商品を滿

載してラージャガハの親しき貿易商の許に行きぬ。其處に於
て、彼聖なる佛陀の世に出興したまひしを聞きぬ。早天、彼
は世尊の御許に到りけるに門戸は天使の力によりて自ら開き
放たれぬ、彼佛に見えて眞の道をさし法に歸しぬ。次日彼は
大施物を佛を始め奉り法の爲に捧げぬ。且つ佛にサーツチ
に來りたまはん事をゆるされたり。

されば彼數多の黄金を擲ちてジエタバナ園を贖ひ、新らし
き堂を築きぬ。中央には世尊の爲に宮を造り、周圍には八十
の長老の爲に各家を建て、他の大衆の爲にも一重二重の壁あ
る家をしつらひぬ。長堂、諸鳥雜花もて修飾せる數多の室數
奇を凝らせり。數多き大なる池、晝夜に歩行する觀臺等苦心
到らざる處なかりき。

かくして新らしき堂も落成せしかば大商は主に來まさんこ
とを乞ひ奉れり。

佛招きに應じてラージャガハより彼處に移りたまひ、恙な
くラーバックの町に到着したまへり。其時富豪の商人は僧院
を裝飾して歡び迎へ奉れり、即ち彼の子息を美しく飾りて宴
衣を着せる五百の若人と共に佛陀をもてなし奉れり。主の後
にはヌハーサプハツダー、キューラスの商人が二女五百の侍
女と共に滿てる水盤もて伴ひ、次にあらゆる裝飾もて麗はし
き彼の妻五百の年長婦と共に食物を以て滿てる鉢を以て進み
ぬ。次に大商自ら新衣を着し同族五百人各五色の旗もちて大
聖に見ゆべくゆきぬ。

世尊數多の僧衣具せられつゝジエタバナの僧院に佛の無
限の尊容と威貌もて入りたまひしに、園の地到處後光もて輝

やき渡り、恰かも大衆は金粉もて糝られし如く光を浴びき。

其時商人金鉢を持ち來り、清水を玉手に澀ぎて曰く、

「我は佛陀を始め奉り、大比丘衆の爲、并に今又は今後四方
より來會する大衆に此僧院を捧げまつる」とてキハラを獻
ぐる式を終へぬ。主はキハラを受けて大に感謝したまひ、
僧院の功德を指示して曰く、

さむさ暑さも凌がるゝ、

野山の獸、毒ある蟲、

寒空の雨も、あそろしき

暑さも風も防がるゝ。」

迷の雲のはるゝまで、

安らかに且つ静やかに、

比丘に住處を與ふるを

佛よき業と褒めたまふ。」

されば賢き人々は

己の幸を省みて、

樂しきみ寺施して

學べる人をやどらせよ。」

笑を含みて比丘衆に

食や飲物あたふべし、

衣、住家も快く

彼等の爲に施せよ。」

さらば僧等は施主にまた
眞の道を教ふべし、
眞よすべし悲しみを
拂ひて罪に落すまじ。

アナータビンジカは次日より宴を設けて九ヶ月も繼續せり。此宴に於て又十八コーチスは費されたり。即ち一の僧院の爲に五十四コーチスの巨額を投じぬ。

古き昔ツバシン佛の時商人ビュナツパスミッタ、金の瓦を地に敷きて此地を贖なひ、一リーグの僧院を建てたり。シンヒン佛の時シリツバダ金の鋤刃を周圍に立て、贖なひ、四分の三リーグの僧院を築き、ツベサビユ佛の時ツツシヤ金象の足を立て、此地を求め、二分の一リーグの僧院を造りぬ。カクサンダー佛の時アキータ金の瓦を敷きて此地を贖なひ、四分の一リーグの僧院を建て、コナーガマナ佛の時ウツガ其地上に金の龜を置きて贖ひ二分の一リーグの僧院を築きぬ。カツサバ佛のときスマンジガラ金の瓦を敷きて此處を求め、廣さ六十エークルの寺院を建てぬ。今や、我が聖なる世尊の時にあたりてアナータビンジカなる商人カーハバナスを其上に敷きて此處を買ひ求め三十エークルの僧院を築きぬ。

されば此地は代々の佛陀の過ぎたまひし所なり。而して我世尊亦御入滅の時に至るまで此處に住したまへり。是は最も近く興出したまへる我等が世尊の御榮也。

今我等、世尊の前生につきての物語りせん。

本性を失ひ居る彼等、何を思ひてか突然打臥し居たる私の上に馬乗に跨り小刀を以て眞向より突き下しましたから手早く身をかはし様一蹴り蹴りますと弱いものです、三尺許り先へばたりと倒れました。其の物響に驚き、表に居りました者共が馳せ来り。大變謝りましたので、其の儘其の夜は再び枕を並べて眠りました。が無學文官の迷信深き波斯人の中には斯様な亂暴者がちよいとあります。併しながら宗教家を以て自ら任ずる者が、暴を以て暴に代ふるの舉動を執りましたのは甚だ恥かしき次第であります。翌日はセムナンと云ふ一寸した小都會に着きました。一體旅宿に困るのは都會であつて、田舎ならば茶店に宿ることが出来ずも、都會の茶店は其れが出来ませぬので漸く馬宿の一隅を見附て休息して居りますと、地方廳より呼びに参りました。其處で使の者と共に出頭致しますと、ムスト、シャマモレキと申す四十以上の至極濃厚なる體格の良き長官が面會致されました。役員一同と共に皆言語不通でしたが、非常に鄭重に取扱れ其の儘縣廳に宿泊することとなりました。テヘラン以東ダムゴン迄は此の紳士の支配下ですが、翌日終日同室にありて政務を視て居りましたが、誠に極單純なもので、書類の入れある手文庫が二箇、書記が二名、顧問らしき回教の僧侶が一名、其れ丈で仕舞です。

ダムゴンの町を経て、二十七日シャルドの町に着きました。前日雪中を大急ぎに歩きましたので、非常に足を痛め、是非なくサキス、ミナイザンスと云ふアルメニア人の宅に滞留して新年を迎へること致しました。此所はアストラバートを通じて露國との貿易市場とも云ふべき地で、羊毛敷物

波斯紀行

(承前)

鈴木 佛

テヘランよりシャルドに至る

テヘラン滞在中に、有名の大旅行家にして地理學者たる瑞典のスピン、ヘイデン氏、西藏再探險の途次兩三日中に來市さるゝ由聞及びしも、旅費の都合もある事とて、十六日の午後二時に出發しました。然るに次の宿場迄一軒の家もなく、不案内の土地柄なる上日暮れ空さへ曇りたれば、寸歩も進むこと能はず、遂に野宿しました。此の地方エルブルツ山脈以南は空氣乾燥にして日中は日光耀き、常に溫暖なるも、夜間は海面を抜くこと高きを以て寒冷なること非常です。道路も首府以西の如き善良のものでなく、而も近きは十二哩、遠きは廿八哩程の間を隔て、少なき村があるのみで、其の間は一軒の家も水もないのが常です。カストラクと云ふ處迄は東南に向つて行きしが是より東北に向うて路は通じ居り、片側は見渡す限りカピールの大沙漠で御座います。

二十一日には、ラスギルと云ふ村に宿りました。此の附近の水には異様の臭味ありて殆ど飲み難し。水の代りにキャンテローブ(甜瓜の一種)が名産であつて、誠に美事なのです。此の夜泊り合せました二人の乞食兵士がありましたが、阿片に

と共に波斯國の三大産物たる綿の産地です。此の附近に生産する綿は悉皆此處より狐の皮及び乾果物と共に輸出せられますので二十四五名のアルメニヤ商人が居留し、商權は彼等の手にある様に見えました。此處の役員にジフアグリハンと云ふ將官が外國語を解する由に聞及び一寸訪問致しました。他のジエネラルやコロネル中には随分無學亂暴な者が有るさうです。

私が旅行せし處にて、尤も人情の善い處と感しましたのは、テヘランよりダムゴン迄でした。波斯人は非常に慈が深く、中には親切の人もありますが、多くは外國人と見ると無暗に誤魔化す、假令彼等の所望通支拂ふとも、出發の際は荷物を差押へ、無茶苦茶な請求をするのが通例です。然るに以上の地間は決して左様なこともなく、つり錢迄も奇麗に勘定して返しましたが、當シャルドになりますと、外國人と取引しませいか又々誤魔化さんとする風が随分あります。

メシヤド

明治三十八年も茲に暮れ、明くれば三十九年の一月二日、足の痛みは稍快方に赴きしも、尙遠路の旅に堪へ兼ねば郵便車に便乗してメシヤドに向ひました。シャルド滞在中非常に厚遇して呉れましたアルメニア人一同は、村はづれ迄見送りました上に防寒の爲とて、ボステンと申す羊の皮の外套を饒別に呉れました。此れは上流社會では用ひませぬが、中流以下は多く使用します。餘り體裁の善きものではありませぬも非常に温かさ衣で、此の衣を引破りて雪中を野宿致しましたも、是迄の如く慄ふことは餘りありません。

郵便車と云ひましても、つまり乗合の荷馬車なので、かた／＼とん／＼と何うも不便なもので歩行する方が餘程結構で御座います。宿場々々て馬を取り換へ、晝夜兼行にて、夜間は盜賊や狼の護衛として一名の騎者が後より送つて参ります。所が忘れもせぬ五日の夕方、ニシヤブル近くに参りました時、荷馬車顛覆して車は微塵に破碎し、乗合十二人、御者を除くの外皆重傷を受けました。幸ひ村近くでしたから二名の重傷者を其處に留めて残りは馬車に乗換へ呻きながら七日の朝午前十時頃にメシヤドに着きました。此地は人口十萬もある大都會でありながら例のキャラバンサライより外に宿屋がありませぬ。私は幸ひテヘラン駐在の大英國代理公使クラントダフ氏より、當地の總領事サイク少佐へ紹介状を持參致して居りましたので、領事館附のサイエト、ムハラク、アリと云ふマホメットの後裔なる印度人の紳士の宅に止宿することになりました。

メシヤドと云ふ語は、殉教者の墓所と云ふ意味なので、回教の系統は教祖マホメット、初代が教祖の息女フワチマと其の夫にして教祖の叔父に當るアリとて、二代目はフワチマとアリとの間に生れたる子ハサム、三代はハサムの實弟フセイン、其の子のアリ、ゼイン、ウル、アビドルが四代、其の子のマホメッド、バキルが五代、六代が其の子のジャハル、七代が其の子ムサムの子がレザと云ふ工合で、此處は此のイマム、レザ即ち回教第八世埋骨の聖地なので、土耳其や印度あたりの遠方より、巡靈者が参拜し來たるのみならず、ホラサン州の首府でありますから、随分繁盛なる所です。併し町

幅狭く且汚く、乞食の澤山なのは驚くの外ありません。墳墓の上に建てられたる金光塔は、日光に映じて遠方よりも望見され、其の内部の壯觀も察せられるれど、如何せん教徒以外は寸歩も境内に入るを許さざる爲、詳察する能はざるは常に外人の遺憾とする所て御座います。日出と日没には、此處より時の太鼓を打ちて、市民に祈禱の時間を報知することになつて居ります。

市場には林檎、葡萄、梨等其の附近に生産する果物、其の外露國製の日用品多く陳列され居り、此處より程遠からぬ露國のアスカバートへの供給品は、又此のメシヤドより輸出されるので、英露兩國に取りましては此メシヤドは軍政上の天王山て御座います。波斯に於ける英國政權は二分されて居りまして、ホラサンキルマン等の阿富汗斯坦ベルヂスタンに密接したる地方は印度政府の管轄下で、官員皆悉く印度政府より派遣されて居りますが、西部は本國政府より公使以下皆任命されて居る。此の東部地方の都會には必ず英露兩國の領事若しくは事務官駐在し其れ等の護衛兵として兩國同数の兵士二三十名宛駐屯して居ります。

日露戦争は波斯國の如何なる寒村僻地の婦人子供迄も承知致して居り、中にシサフザラと云ふ詩人は此の戦争に關する二千二百の自作詩を持參して訪問して來られました、其の二三節をムハラクアリ氏通譯して聴かされましたが、何れも非常に日本を讚美致して居ります。併し思想は矢張り歐米人同様、日本が一足飛びに僅々二三十年間に半開より文明に達したと云ふ淺薄の考へてした。

アヌハダラ總督其の他二三の高官を訪問して、大雪に遭遇せざる前に當地を出發すること、しました。總領事サイク少佐夫妻が種々親切に待遇されしのみならず、少佐は十分旅行に經驗ある人で、道中の困難は能く承知のことですから、必要品蠟燭マツチの類に至る迄注意し呉れ、驛馬一頭に護衛兵兼道案内として騎馬のトルコマン一名をビルジャン迄附けて呉れました。トルコマンは一時暴威を振ひし遊牧人種で、目下露領阿富汗斯坦及び此の附近に散在致して居りますが、質樸なので英國人の信用を得て居ります。

メシヤドよりビルジャンに至る

阿富汗斯坦探險の目的を以て、種々の困難と戦ひながら東行して來ましたのですがメシヤド駐在の阿富汗斯坦の政務官アブドラハン氏は、私との面會を喜びしに拘はらず、同國通過は國王の許可あるに非ざれば不可能の旨を以て断然入國を拒絶せられました。其處で已むを得ずサイク少佐の忠告に従ひ、ベルヂスタンを経て印度に出づる豫定にて、是れより方向を變じ南下することとして再びシヤリハバト迄二十四哩引返し、其れよりツルバチ、ハイダライに向ひました。此の間は山道なる上、一面の積雪僅に、一條の駱駝の歩行路があるのみで、其の外にあるものは此の附近の名物なる狼の足跡ばかりです。

シア山を通ります道は二様ありて、車輛は迂廻して平坦なる道を行くのですが、私は電線に隨ひて誠に嶮しき坂を超えましてメシヤドより三日目にツルバチに着きました。前以て總領事より報知してあります故直に同處より英國領事館に赴

き、翌一日休息すること、しました。此の町のカーグザーは小生の來着するや否や直に來訪して参りました。先方より訪問するは波斯國の禮なのです。此のカーグザーと云ふは先づ外交官とも云ふべき役目で、外國人に關する事務一切は此の人が取扱ふのです。

ツルバチは可なり耕作されて居りまして、果物の名所です。十四日の夜はハイザバトと云ふ村を過ぎましたが、此の村を出ると直に道が兩方に岐れて居るので、幸ひに先方より來る一人の男に道を尋ねると、はんはんふうんと好い加減の事を云ひます。誠に波斯人の了解力の薄いには常に困りました。彼の男の云ふ通りでは少々怪しいと思ひながら、他に聞くべき家も人もないので二十四哩許り行きますとムンデと云ふ村に來ました。又聞き合せますと大變な方角違ですから、本道へ出づる爲に二十四哩沙漠を一生懸命に馬を飛ばして真東に道もなき所を横ぎりまして、日没に漸く宿場に着きました。ツルバチ以南は車は一切通じませず、電線もないので、道の分り悪きこと非常で、茶屋一軒もなく、餘り外國人の通行もない所ですからオロス／＼と唱ひて大勢物珍らしさうに私の後より附いて來ます。昔し日本で外國人を見ると皆亞米利加人と思ひました如く、波斯では外國人を見ると皆露國人と思ふのであります。

ノーローと申す村の附近の駱駝の養成所と見えて、無數の駱駝が野邊に居りました。カインの町へは参りませぬけれども、此のカインよりビルジャン附近は阿片の生産地で有名なのです。支那の如く當國上下を通じて阿片に心酔して居り

ます。ビルジャンは人口一萬以上もありませうが、少しの樹木もなく、飲料水は雨水をタンクに貯へて年中の飲用にする仕掛で處々に地中深くタンクが敷設してあります。敷物も亦此の地の名産にて、職工は多く子供を使用して居ります。一日の給料一クランより四クラン位ですが、正直に働く時間は四時間位、上等の敷物を製するには六箇月以上を要するようです。

少々都合の爲に四五日此處に滞在することに致しました。私の到着せし翌日、此處の知事マホメド、イブラヒン、ハン氏は見舞として砂糖四十斤茶五斤を贈り、遠路の勞を慰せられました。其處で答禮として訪問致しましたが、シャカトウルモルク（官名縣知事のこと）は僅か二十三の青年で、至極人つきの善き人でした。邸宅は市より三哩許りの所にありて邸前には獵鷹が數羽飼うてありまして、室内の裝飾などは中々奢りを極めて居る様に見受けました。此の人は長兄の跡を繼て相續して居られますのですが、固り祖父の餘光もありませうが、波斯の地位は金次第で如何やうにもなりませんのです。

風俗

波斯の家屋を述べんに、分限長者の邸宅は平屋根にして中庭あり、多く二重に造られ、後部の室は婦人用にて、通例男女入口を異にして居ります。メシヤド附近及び以南は木材に不自由なる爲、海狸の住居然たる丸屋根なのです。

服装は、上流は折衷風の洋服ですが、中流以下は一寸支那人の股引様のものを穿ち、肩より足許に至る長さ上衣を日本流に前を合せて、其上より帯を致して居ります。下等社會は沐浴すは不神聖の行爲とか云ふので、翌朝は男女共に沐浴する習慣ださうです。彼の神聖を以て自ら居る回教の僧侶が公然多妻を有して顧みざるに至つては自家撞着の甚だしきものと思ひます。洗湯は土耳其流の蒸風呂ですが、木材の少き所ですから燃料は駱駝の糞を使用して居ります。

食事は日中及び日没後の二回ですが、上流は多く米飯を用ひます。米は印度米よりも遙に上等で、肉若くはギョと共に煮るのでから餘程高價につきますが、下女下男の食物造一旦山の如く持ち出して主客等の食事を済まして後残りは彼等の食事となるのです。下流は麵粉が定食です。茶は日本同様絶えず飲用して居る。彼等の坐する時は日本流に膝を折る等、種々日本に類似する習慣があります。

彼等は誠に丁寧な奇麗なる言語を使用し、禮儀に正しきも、多くは外形上の虚儀虚禮に止まる如く感ぜられました。彼等は日本人を喜び厚遇せしも、其は印度人殊に印度教徒の如く日本人を以て東洋人種の保護者若くは文明の先進者として貴ぶに非ず、只歐米人等が日本人の勇武を賞讃する如く、彼等自身の敵視する露國に打勝しを以て日本人を喜ぶのみであります。

ビルジャンよりシイスタンに至る

二十八日にビルジャンを出發して翌一日ムートと云ふ村に滞留し、三十日には雨を犯してクランダラバートと云ふ村に参り宿しましたが、夜中に雨は變じて雪となり、翌朝は二尺餘りも積みし上尙霏細紛々、道も分かぬ迄降つて居るので、又此處に一日滞留し、其れより四日目にアリハバートと云ふ處に

ることなく、晝夜着流のまゝすから風が一抔生かつて居ます。婦人は中流以上は外出を禁じて居ります爲、委しく知ることが出来ませぬも黒衣を頭部より一面に纏ひ、面部は白布を被ひたる婦人をチラホラ市中に見受けました。田舎や何かはぼろを纏ひたる下等婦人許りです。帽子は土耳其風の一箇八クラン以上の黒帽子を中流以上は冠り居るも、下流は釜の底の如き土色のものを冠り居り、直段は凡そ一クラン若くは一クラン半位です。僧侶は其の上より白若くは黒の鉢巻をして居る、併しながらメシヤド以南は一般に鉢巻をして居ります。

宗教は回々教で、國民の他宗教に改宗することを許しませぬ。上流者を除きては一般に疑り固りの信者で、一日に數回の祈りを行ひ、他宗教徒を嫌忌すること甚だしく、丁度歐米に於て教會や神様を八釜しく云ふ連中に却て偽善者の多き如く、外形上の信者に限り、慾の深さのみならず種々の悪行を爲して平氣で居ります。

一夫多妻は同教の教ゆる所ですから、中流以上は皆多妻で、其の爲家庭の風波は随分絶えないさうです。併し下等社會は生活の困難の爲、一妻に満足して居ります。結婚離婚の容易なる爲、一夜若くは一月と云ふ風の結婚が行はれ、娼妓同様の事實があります。尤も姦通は餘り無き様です。阿富汗斯坦附近の地は、随分同國人の多數が住居して居りますが、同國人は姦通の場合は男女共に殺害するか、若しくは男子を殺害して女子の鼻を削き落すが習慣となつて居るさうです。然れば折には鼻のなき婦人を見受ることがあります。男女の接近

着しました。此の邊より氣候も變り、椰子の樹などありまして何となく熱帶國の趣がしました。

翌日バンダン即ち牢屋と云ふ村に來ますと小生宛の電報がありまして郵便の着する迄出發を見合せられ度しとのこととあります。尙所の檢疫醫に向けては、是非生のシイスタンへ行くとを差留むべしとのホラザン總督よりも命令電報も達して居ります。て已むを得ず二三日滞留と決しました、幸ひ其の翌夜郵便が到着しまして、事情を知ることが出来ました。其の大意は目下シイスタンはベスト流行に付危険の恐れあり、依て道を轉じてケルマン市に出てバンダラアバス港より海路印度に赴く様忠告し、其上右費用の全部を負担し且途中の護衛者をも差添へ十分の保護を計るべしとの總督よりの命令ありとて、カイン縣知事の手紙でありました。又サイク少佐よりも同様の手紙がありましたも、小生は早速長文の電報を以て、

御親切は感謝するも病氣は恐るゝに足らず、旅費も印度に達する迄は十分と思考し居れば、斷然シイスタンの行路を取るべし

との趣旨をアスハダラ總督に報じ、前進を繼續しました。是れより先は一面の平地にて、草一筋もなく、二月八日にシイスタンに安着しました。

此のシイスタン附近には唯一の頂上の平かなる卓子狀の小山があるのみにて、此の山は一面の古墳と云ふ話です。此邊の墓は死人を埋葬すると云ふより寧ろ埋上げるのですから、シヤコールや犬が常に食ひ荒して随分殺風景なものです。土

地は、鹽分質にて、恰も雪降りの如く、一面真白で樹木なく草なく、風強く、蠅多く、いやな所です。ヘルムンド河の行き止りですから、東西南北何れに行きも水を渡らねばならぬ。所によりては肩を越し、淺き所も腰に達するのです。一旦水流變ずるか出水の爲上方の堤防破るゝときは、住民一同悉く水底の藻屑となるより外はないのです。

斯る土地ですから、水鳥多く集り、之を捕獲するを以て職業として居る一種族が居ります。此の種族は町を距ること十五六哩ナイザレと申す郷に住居して居る。其の屬が唯今ベストの流行地なのですが、何分にも地方始めての病氣として其の眞性のものなるや否は確定し難きも、其の發生は昨年十一月頃なるべしとのことにて、日々多數の死者ある由、一月末に至りて傳へられしより、英露兩國の醫官出張の結果、ベストと決し、今や土人の恐るゝこと甚だしく、同地方とは嚴重に交通を遮断して居ります。十五六哩乃至二十哩は人家もなき波斯村落のことにて、他に蔓延の憂はなき様に思はれるも、村民等他に食物を得るの道なく、地方官吏亦例の無頓着なる爲、可愛想に餓死か病死か一二絶えざるよしです。

シイスタンには英露兩國の領事館あるのみならず、兩國の銀行支店もあります。純然たる洋風造りの家屋は、英國の波斯帝國銀行だけです。市街即ち土人の住居は、高さ三十尺位の塀を以て取り圍まれたる長方形の城内にありて、カイン縣知事の異母兄なる二十七八歳の人が長官なので、邸宅の門前には囚人が珠數つなぎにしてありました。元來波斯全體に監獄なるものなく、囚人は重き鐵鎖を以て連繫するのみで、決し

て食物を給與しませぬ。然れば彼等は通行者若くは來訪者の憐みに依りて露の命を繋ぎ居るのみですが、長官交迭の際は多くは斬首されて仕舞ふのです。

ヘルチヌスタン通過は、メシヤドより印度政府に出願し置いたのですが、小生の着後再び領事なるマクフワセン氏より電報にて聞合せたるも、未だ何等の指令なき爲、此處に十數日逗留しました。滞留中知事自身に英國領事館迄答訪に來られましたが、僅か二町程の距離なのに五六十騎の從者を前後左右に引連れて仰山の事でした。時に依ると百人位引率するとも有るさうです。二十五日に至り印度政府より通行許可の報がありましたから、二十七日に再び徒歩旅行に上りました。

ヘルチヌスタン通過

シイスタンよりメシケケに至る凡を五百哩。乗用駱駝にて二十五日間、貨物運搬用の駱駝にて三十八日を要する行程にして、前者は一頭に付二十八ルピー、後者は一頭に付十七ルピー半の賃金たる定めなるも、幸ひに一群の旅客ありて八頭の貨物用駱駝と共に同日印度へ向け出發するものありて小生も其の連中に加はり、三月六日に波斯、阿富汗斯坦、ヘルチヌタン三國の境上たるクヒマラクシアと云ふ僅か二三軒の小村に到着しました。途中時にヘルチヌタン人に出逢ひしが、彼等は日露戰爭は固より日本と云ふ國さへも知らぬもの共なり、此處に波斯國稅關の出張所ありて、出國許可を受けました。波斯國稅關吏は皆自義人にて此處にも一人の年若き自耳義人が駐在して居りました。小生の通過は前以てシイスタンの英領事より通知がありますので、故障なく翌日英領に入り、

ロバートと云ふ處に於て一行と別れて、二日間滞在の上、同處警官ヒュー氏の厚意に依り、三名の歸休兵と共に駱駝の背上に乗りて出發し、三日目に前の同行者を追越し、二十二日に兼ねて風評ありたる英國の某大尉二百五十名の印度兵及び八百頭の駱駝を引率して行進の途中なるに出會し、共に一杯の珈琲に喉を潤し、暫時會談の上西と東に別れ、普通二十二日程の所を十四日間に通過して、二十三日の午後十一時に無時メシケケに到着しました。

此のシイメン、タメシケケ貿易路は今より八年前政府の手に依りて開通せられたるも、軍用上の要地として英國人以外に一切外國人の通過を禁じて居るので、前に一寸記し置きました彼のヘイデン博士に、今回破格を以て通行許可を與へ居る所へ、小生の出願となつたので、印度政府より外人に對しての許可は小生が二番目なるも、ヘイデン博士は目下カビル及びバルトの大沙漠探險中にて、當時消息不明なるので、斯の地を通過せし外人の嚆矢は小生なるも、如何せん途中見聞する所は一切秘密を守るべき約束の爲に、此處に直接間接にも公表する能はざるは遺憾の次第です。

此の日ベルチヌスタンの政務官ベン少佐は、小生迎ひの爲態々カシシギの陣營より出張し來り居りし由なるも、小生の到着遅延せし爲宿屋其の他の注意をなし置き蹄營せし由。メムシケケ、クエツタ間の鐵道は、一週間僅か三回の發車あるのみですから、翌日八時發の列車にて當ラホールに向けて直行することとなり、カシシギ驛には早やベン少佐夫妻出迎ありていと懇懃なる挨拶あり、二十六日の早朝ラホールに安着、

此處にて暫時休養の上、家郷より旅費の到着を待ち、更に第二の路程に上ることとし、茲に筆を執りて布教の傍ら聊か見聞の事實を草しました次第です。

目下當地は樹木青々として百花爛熳と咲き亂れ、加之印度人殊に印度教徒滿腔の熱誠を以て小生を佛僧として尊敬し呉ます。然れば過去の艱難は跡なく消失せしも唯有るものは尙一層の艱難を肩して如來の大道を宣布し、自他共に一日も早く常寂光の都に到達せんとの希望のみです。願くは葉末の一滴落て、涅槃の聖流に注入せんことを。

雑感

行程凡そ一千六百里、野に宿すること十五回、時に王侯の客となるかと思へば忽ちにして空腹、雪中狐狸を友として眠ると云ふ浮沈甚だしき生活を送り、滿百日の間に心裡に映ぜし感想を述べん。

余が通過せし地方は、一面沙漠にて、耕作の見込餘りなきが如く思はれ、人民一同阿片に沈淪し、官吏は賄賂を貪つて、自家の虚榮に誇り、愛國愛民の思想あるなく、小民は運命説を奉じて是非善惡唯是れ神意と諦め毫も勉強努力することなく昔時の文化見るに由なく、日々退き月に衰へ、如何にいき目に見るも前途の光明は認め難く、露國は駭々として進み來り英國亦印度の安全及商業の發達と云ふ名義の下に隠然露國に對抗し、寒村僻地の婦人小兒に至る迄、日露交戦の勝敗を知らざるものなきは、實に露國の權勢を殺がんとする英國の政略に由り、將來英露の衝突は決して印度にあらざして波斯にあるが如く思はれ、波斯獨立の永續は到底覺束なかるべ

し。近頃同國政府は議會政策を執らんとするが如き風説あるも、是れ實に腐敗を一層盛にし、亡滅を速かにするものと考ふ。

同國に於ける交通機關は甚だ不整頓なる上毒獸盜賊の出沒甚だしく、爲に旅客は銃劍等種々の武器を携帯するに非ざれば往來するものなし。全國一箇の鐵道あるなく、裏海より波斯灣に至る本道、即ちレンジュエル間には貨物の運送頻繁にして鐵道の收支は相償ふべきも、國民の迷信深く彼れの念頭には鐵道なる觀念なし。何となれば波斯は時間に無頓着なる上、大抵如何なる貧民と雖も、一二頭の驢馬を蓄へ居り、所用の節は之に乗じて一日に二三十哩の往來を爲し得ればなり。

歐米各國所謂基督教國民は、人種の相違せる故か上下一般吾人東洋人に對し何となく高慢なる所見え、佛教徒と云へば直に偶像教と混同し蔑視する惡風あるも、回教國たる波斯人は土耳其同様、吾人に對して決して高慢なる舉動なきも、中流以下は異教徒を嫌惡すること甚だしく、吾人の手に觸れしものは屋外に持ち出て水を注ぎ滑めると云ふ風にて、旅行者に少からざる不便を與へます。

波斯には米國のホテル若しくは日本の宿屋と云ふべきものは全くなし。村々にキャラバンサライと呼ぶ建物あり。村と稱するも日本流の村にあらずして、樹木の二三本ある所にて鹽分を含める泥水の少し流れ居る所、其處にビイバーの住居たる家四五軒あり、是れ即ち村なり。村より次の村に至るの距離は近きは十六英里、遠きは四十英里、其の間休息すべき家屋や飲むべき水なきは通例なり。宿を借らんとして時に醜

穢なる廐の一隅さへ國と宗教を異にせる余は屢々拒絶され、廣漠たる平原、風寒き雪中に夢は遙に故郷に通ひつゝ、毛布一枚に夜もすがら明せしこと多かりき。

士民の食事は朝七八時に茶三杯、午後一時頃に正食、午後九時頃に夜食を用ひ、貴賤通じて一日二回の定食なり。余が旅行中米國の未だ焼かざるバイの皮然たるブレットと泥水が普通の食物なり。而して又是れ實に余が今日尙生命を支へ居る食物なり。富みたるにはあらねど未だ衣食に事缺かざりし身が、斯の如き西亞の一角、不毛の曠原に彷徨ひ、筆紙にも盡し難き困苦辛酸を嘗むるもの、皆是れ余が正法宣傳に附隨して受くる最も光榮ある痛苦にして、壽量品の所謂衆生見劫盡、大火所燒時、我此土安穩、天人常充滿とは昔も今も變らざる余か精神状態なることを。(二月八日波斯國シスタンに於て、完)

We spoke of storm and shipurceck,
Of sailors, and how they live;
Of journeys' twixt sky and water,
And the sorrows and joys they give.

We spoke of distant countries,
In regions strenge and fair;
And of the wondrous beings
And curious customs there;

Of the uredched dwarfs of Sapland,
Broad-headed, wide mouthed, and small,
Who erouch round their oil fires, cooking,
And chatter and scream and bawl.

講義

歎異鈔

第壹章(續)

近角 常觀

しかれば本願を信ぜんには、他の善も要にあらず、念佛にまさるべき善なきゆへに、惡をもあそるべからず、彌陀の本願をさまざまのほどの惡なきかゆへにと云云

いかにも聖人が本願を信愛したまへる、確信の極點を盡されたる御言葉である、本願は實に絶對の力である、念佛は誠に絶對の善である、此絶對无限の大慈大悲の本願念佛の前には、他の世上相對の自力の善の如きは、善として成立たない、我等罪惡の深重なる、實に極りなしと雖、願力無窮にましませば、罪業深重も重しとせず、絶對他力の前には惡も惡として成立たない、嗚呼實に廣大なる本願力である、聖人の和讃に名號不思議の海水は

逆勝の屍骸もとゞまらず
衆惡の萬川歸しぬれば
功德のうしほに一味なり
盡十方無碍光の
大悲大願の海水に

煩惱の衆流歸しぬれば
智慧のうしほに一味なり

とある。絶對無碍の弘願一乘海のうちには如何なるものをも皆同一鹹味である、本願を信ぜんには他の善も要にあらず、たとひ河の流は清ければとて大願海に流れこむときは其清きを歡び迎ふる譯ではない、念佛にまさるべき善なきが故に、いかなる清き流れも、同一鹹味の鹽の清淨なるに及ぶものはない。惡をあそるべからず、たとひ流濁ればとて大願海は決して之を拒み辭する譯ではない、彌陀の本願をさまざまの程の惡なきが故に、如何に濁ればとて鹽の味を妨くほどの濁はないのである、いかにも廣大なることである、こは、實に歎異鈔一部の骨子たる、彌陀の本願の御力は善惡二業にかゝはらず、すべて助けたまふといふ聖人の確信を示されたるものである、口傳鈔上第四章に善惡二業の事を述べたまへる節に曰く、聖人親鸞もほせにのたまはく、某はまたく善もほしからず、また惡もあそれなし、善のほしからざるは、彌陀の本願を信受するにまされる善なきがゆへに、惡のあそれなきといふは彌陀の本願をさまざまの惡なきがゆへにと云云

嗚呼如何にも我等は善を爲さんと思へども思ふやうに善をも爲す可らず、惡を避けんと思へども、惡はますます熾である、而して善が出来ないと覺悟はしても、やはり、善は欲するのである、避けられない惡の爲に身を焦す恐れを抱きつゝあるのである、所謂嶮巖に半ば身は落ちて居ながら攀ぢ上らんとものがさつゝあるのである、否、身は落つれば落つる程もがさざるを得ぬ境遇である、而して其者を後方より確かと攫みたる

まひて落したまはぬ唯一の救済力が彌陀の本願である、實に嬉しき彌陀の誓願不思議である、此誓願不思議にたすけられて往生を遂ぐることを信じてみれば、もはや善もほしからず、悪も恐れなし、唯々我等の一身は任せて大慈大悲の本願にあり、唯この本願の力に攫まれてみれば我等は徒らに自力を以て攀ぢ上らんとて、もがく必要もない、またたとひ、もがきしてみればとて、此本願力に攫まれずんば我等は空しく草や木を攫みながら落ち入るのである、この自力で攫みもがくのが即ち他の善である、後方より我等を攫みたまふ力が本願である、念佛である、是が即ち本文に本願を信ぜんには他の善も要にあらず、念佛にまさるべき善なきゆへにといひ、又口傳鈔に善のほしからざるは彌陀の本願を信受するにまされる善なきがゆへにと言はれたる真髓である、

一寸一言注意を加へたきは本文には念佛といひ、口傳鈔には本願を信受するといふてある、こは言ふまでもなく、信と行と、畢竟同一である、彌陀の誓願不思議にたすけられて往生を遂ぐるなりと信じたのが即ち本願を信受したのである、信受してみれば念佛申さんと思ひたつ心の溢れ來りて口に顯はれたのが即ち念佛である、心にありては信心、口にあらはれて念佛。抑南無阿彌陀佛といふは、阿彌陀佛にすがるのである、たのむのである、まかすのである、懐だかるのである、安んずるのである、蓮如上人が一代の教化、六字を以て信相を示したまひしは實に難有きことである、夫が口に溢れ出て、感謝の念佛となるのである、此の如き大慈大悲の光明に攝取されて護持養育せらるゝ身になりてみれば徒にも

がくべき自力の善の要もなく、亦少しもほしからずと聖人の仰せられしは、全く我等が出来ない善のために苦しみつゝあるものに向て唯一の德音である。

次に悪をもおそるべからず、彌陀の本願をさまたぐるほどの悪なきが故にといひ、或は悪のおそれなきといふは彌陀の本願をさまたぐる悪なきがゆへにといふは、上の他の善も要にあらず、善もほしからずといふのよりは一步進みたるやうにきこゆれど畢竟表から言ひたると裏から言ひたるとの區別にして全く同じ心持である、身は半ば崩壊に落ちて自力で攀ぢ上らんと企つるは自分の身の重さで下に落ちるを恐るゝからである、抑々人間が自力の善を勵むのは、自己の罪業深重を恐るゝからである、他の善も要にあらずといふは抑々自己の罪業を恐るゝとのなくなつたからである、如何に身は重くとも後より我を攫む所の力あるを信知すれば、もはや大丈夫である、安心なものである、しかも其力は實に大慈大悲の極なき御力にして、我等如何に罪重くとも其力を妨ぐるとは出来ぬのである、如何なる我等無明煩惱の力強盛なりといへども、其内障に障へられぬ無碍の光明である、無碍の一道である、斯の如き無碍の力に攫まれてみれば落ちるとは出来ぬのである、蓮如上人は「いかに地獄に落ちんと思ふとも彌陀如來の攝取の光明にねさめとられまいらせたらん身はわがはからひにて地獄へもあらずして、極樂にまいるべき身なるがゆへなり」と極言されてある、かくの如く悪が飽まで悪しきとしても本願力に安んずることを得たるが爲に、善もほしからず亦益にも立たぬのである、これが實に悪をも恐るべからず、彌陀の

本願をさまたぐるほどの悪なきがゆへにと仰せられし聖人の偉大なる信心にして我等自ら動くあたはざる罪惡深重のために苦しみ、處置すべからずと知りながらも此他力の見えぬために徒に我罪を恐れつゝあるものに對しての唯一の光明である。とても處置すべからざる負債のために苦しみつゝあるものは之を引受くる人のなきがかりは處置すべからずと覺悟しながらも心配せざるを得ぬのである。身は九分九厘崩壊に落ちて、もはや、とても攀ぢつべからざるのみならず、大なる力に攫まれねば、づるづる落ちつゝありながら、一刻も恐れずには居られぬのである、幸に本願他力のために救はれるため、此の如き境遇にありて之を恐るゝこともなく、心配することなき大安慰を賜はりたのである、

されど此に一つ特に注意すべき點がある、いかにも本願を信じ、念佛申して、善もほしからず、悪もおそれなしといふ大安慰の境に到らして貰ふのであるが、夫は唯本願不思議の一つの力がある爲である、我等は、此力に對してみれば、よく／＼罪重きものにして落ちざるべからざるものにして、亦如何に企つるも自力を以て攀ぢ上るべからざるものなりとの自覺心は益々明らかとなるべき筈である、我等は此大慈大悲に感謝する心の溢るゝと共に、如何にも我等の罪業深重を懺悔する心は益々湧き來るのである、そして此懺悔と感謝とが別物ではない一つの物である、然るに古今を通じて歎異鈔を讀みて動もすれば大なる邪見に陥り安き處がある、夫は畢竟此本文を誤解するからである、實は誤解ではない、信仰で讀まずに文字でよみ、理屈で讀むからである、即ちこうである、本

願を信ぜんには他の善も要にあらず、善など爲す必要はない、悪をも恐るべからず、彌陀の本願をさまたぐる悪なきがゆへに、何を爲すも勝手次第である、といふやうに自分の勝手に牽きつけて善はいらぬ、悪は爲してもよいといふ様は放逸無慚な考を起すことである、こは固より歎異鈔をよみてかくの如き誤解を來たしたのではない、本來此の如き得手勝手な横着心が歎異鈔の言葉が口實として暴露されたるに過ぎないのである、何んとなれば善も要にあらず、悪をも恐るべからずといふ文句のみをよみたるのみにして其真髓たる本願を信受するとか、念佛とかいふ、言葉がかくの如き人に對しては少しも讀めて居らぬ、少しも力となりて居らぬ、浮きて居る、即ち力とすべき點がない、従て口では他の善も要にあらずといひつゝ、心中何んとなん不足である、附け元氣である、口では悪をも恐るべからずといひつゝ、底には頗る氣持がよろしくない、不安である、虚力味である、装へば装ふほど却て恐ろしい、實はかくの如きは邪見には違ひないが善をも爲せず、悪をも避けられぬために、自分の氣休めに強てかく、自ら偽りて一時を姑息した横着心である。

たとへば度々犯罪を爲して監獄に入りたる息子に對して、汝は親の恵みを知れりやと問ふならば、彼は必ず答へて曰はん、親の恵みは實に辱し、他人は我を捨て、顧みず、然るに親は我を捨て、下さらぬと言ふて居る、而して彼か所行を顧みるに少しも犯罪が止まぬ、そして彼が心の中を問ひ質すと、如何に親なればとて、このまゝ家に歸るも面目なし、何んとか一つ成功して、身を立て故郷に歸らんとの下心である、そ

のつまらぬ虚榮心が却て次ぎの犯罪を引き起すのである、遂に親に見附けられて、無理々々に我家に歸りてみるに、如何にも自己の罪に責められて苦しみの餘り、親の金を濫費し、從來の習慣止まずして放蕩に身を持ちくづし、親は我を捨て、くたさぬゆへこれによいのである、仕事をせよと親は言はれぬ、悪しきも咎めぬのが親であるといふて居るものあらば如何、かく言ひつゝある息子を眺めつゝある親の心は如何であろう、是が親は息子が我慈悲をよく味ふて呉れたと満足するであろうか、口で親は我を捨て、下さらぬと言ひながら身を立派にして故郷に矜らんとする虚榮心は何事ぞ、親の汗膏を濫費しながら恰も我物顔に考へつゝあるは何事ぞ、眞實親の慈悲を頂かぬからである、つくづく親の慈悲を感じ来れば此の如き失敗に失敗を重ねたるものを捨てずして直ちに歸り来れとは眞に親の御恵である、此絶對無限の大慈大悲に接してみれば抑々此の如き零落の身の面目を改めて歸らんなどいふ考は一點も起すべし餘地がない、また今まで親の心の分からぬまでは親の與へた金の價をも認めずに居たが親の他迄盡して下さつた御慈悲を頂きて見れば、一文の金も、一本の書信も、一言の戒も皆親の心血の塊である、我幸にして此親あり、此親の慈悲あり此慈悲の救済あるは何たる光榮ぞと、面目も、外聞も、投げすて、ひたすらに、親の恵みに感泣して、即時の老親の膝下に立歸りて、即刻出來得るかぎり働きて、鴻恩の萬一に酬るんとするのが眞實の親の恵みが分りたのである。

「三恒河沙の諸佛の出世のみもとにありしとき、大菩提心也

嘆 咏

偶 咏

八月十日信濃國立科山なる巖の
温泉に遊ぶゆくりなく詠出た
る短歌十首を録す

左 千 夫

眞白玉透き照るまでに明らけく清き出湯が瀧つせ
のこと

信濃には湯は澤なれど久方の月讀のごと澄める出
湯や

神さぶるみ湯の光りに現身の醜のむくろも見らく
うるはし

國土の神の眞心さなからに出湯に湧くかうべも尊
とさ

こせども、自力かなはて流轉せり、そも、我等が身の罪惡のふかきことをも知らず、如來の御恩のたかきことをも知らずして自力心を挟みつゝあるが抑々我等迷妄の本である、全體我等が自分でよきことが出来るつもりが間違である、また佛の御催にあづかりて念佛でも申せば夫を我物の如く考へるのである、たとひ佛の恵みときよても、夫は當然であるかの如く考へるのである、よく、自力根性のすてられぬことである、かくしても心が安らかでなきものゆへ、遂に善をせずともよい、悪をしてもよいといふやうな邪見に陥るやうになる、眞實の大慈大悲を頂きみれば、實に我身は現に是れ罪惡生死の凡夫である、過去を顧みれば曠劫より己來常に没し常に流轉したるものである、將來を望むに亦出離の縁あることなき身である、唯茲に彌陀の本願の御力のみ命の繩である、此大願業力に牽かれて、善一つ出來されと、他の善も要にあらず、唯南無阿彌陀佛と佛恩を仰ぐばかりである、罪業深重なれど願力無窮なるがために落ちんと思ふも落したまはぬ佛の御不思議を仰ぐの外はない、實に是れ歎異鈔の骨髓である。仰ぐべく、信ずべきの極である。



人の世の言限りあれば神ながら清き出湯も言に言
ひ難し

國土の神の眞奈湯は天雲もまけと守るか今日も降
りきぬ

ねもころに心とめて浴み居ればいよ、尊く清き
出湯や

信濃には國ぬち足はし出湯湧く神の眞奈子の信濃
國原

朝湯あみて廣き尾のへに出て見れば今日は雲な
し立科の山

さのふ見しおくの澤邊の花原を猶こほしみと又の
ほりきぬ

勿來關にて

甲 之

里はなれさびしき野への眞直路をけぶり吐きつゝ、
流車ゆきかへる

天つ日の晴れ間ともしき荒磯べにしほ汲むあまを
見らくかなしも

波際にもろ伏す松の下草に花もさかなく見る目さ
びしも

沖つべに波うちかへす荒海の見る目のかぎり行く
船もなし

いにしへの人がふみけむ山の上の草深みちの露に
ぬれけり

いにしへの片見と人の植ゑつぎし櫻若木は紅葉せ

りけり

さにづらふ櫻紅葉は花もなき尾の上のかざしぞな
吹き秋風

めぐる水波のゆらぎのどこしへに全たけむものは
見るよしもよし

底ひなき空のまほらよ三千年を光り傳ひて星かゞ
やけり

晝の星のさびしき見れば長寝よりやゝに醒めたる
心空しも

霞が浦より

甲 之

しくしくに雨ふる松の下道を遠かくれ行く馬か人も。

夢畑の中のみ霧にさよげたる秋の七草にほひしるしも。

見はるかす霞が浦の沖つ邊に煙はく見ゆ船つくらしも。

天つちのいつれのところにありさても人のまごころは
とけしむばゆ。

時報

傳道日乗

七八二ヶ月の間各地有志諸氏の熱誠なる款待を辱し、殆
むと寧日なく傳道し來りて恙なく學舎に歸り、新秋の候、復
中央首都の傳道に従ふを得る、全く是れ佛天の御恵み也、委
しき紀行は後にして、此夏過ぎし道筋のみを記して、其間に
賜はりし各地同朋諸氏の熱き厚意を感謝し奉る。

高松

七月十日より廿日に至る十日間晝夜、佛敎研究會の講話をな
す、晝は歎異鈔を講じ、夜は釋尊傳を辯ず、會場は興正寺派
別院、會員百八十有餘名、僧侶は勿論市中有力者、典獄、裁判
所長を初め官吏、工業學校長、師範學校教授等教育家學生其
他此等の人々の家族皆來聽せらる、稀なる清新の會合なりき、
其間婦人會、和合會、法話會、本派別院に於て各講話會をな
し、監獄に於て教誨をなし又井上圓了氏と共に十日に研究會
の公開演説十一日に大谷派の催にかゝる公會堂の演説に出席
して別を告げたり、本會は當市有力者の合同に成るものにし
て藤井神谷兩氏主として幹旋せられ、會員何れも非常に眞面
目に熱心に道を求め安心を得たまひしは實に尊き事なりき。

丸龜

十二日より十四日に至る三日間講話を爲す眞宗各派寺院の合

同して主催せらるる所、講題は實驗的信仰論、第一日には時
代思潮と信仰、第二日に絶對の救濟、第三日は國民の自覺、
丸龜は高松に比して思想上の動搖多し、爲に青年にして心を
基督教に傾くる人ありしが、此等の人々も共に佛陀の慈悲を
喜びたまひしは何より嬉れしき事なりき。

岡山

十五日十六日兩日岡山千輪性海師の寺に於て開催、十四日午
前婦人會信仰談話會をなし監獄にて教誨同日及十五日午後公
開演説を爲し、十五日夜亦再び有志信仰談話會を催す、同地
は同朋小林越智氏等の女子教育に従事せらるゝあり、又高等
學校の佛敎會幹事諸氏又白神氏兄弟の如き求道會の同朋多く
和氣篤々たるものありき、又基督教中心の土地柄なれば、其
傾向を有せし人々も來聽ありて、後に深く佛陀の慈悲を喜び
たまひし由の報に接せしはいとありがたき事なりき。

大坂

十七日午後青年會及び婦人會の催にて大谷派別院廣間に於て
演説し、其夜堀川大坂兩監獄吏員の修養會に於て講話をな
し歸りて興正寺別院にて信仰談話會を催ふし、翌十八日午前
本派別院 相愛女學校にて一場の講話を爲せり、同地亦同朋
諸氏に會し、友情濃かなり、其夜の急行にて歸東の途につき
十九日朝來着。

東京

大日本佛敎青年會の第十五回夏期講習會は芝愛宕下の青松
寺に開かれたり、二十日二十一日の兩日は之に出席して自然
法爾章につき講話を爲せり予は年々必ず之に出席し來れるを

以て本年も其例に倣はんとて歸京し來れるなり、二十一日は第二求道會土曜講話を爲し、二十二日は求道學舎日曜講話を爲す。

甲州

八月一日より五日まで甲州市川町の靈光會の講習會に赴く、境野哲君及び加藤明堂君と共に三人講師たり、一日甲府にて公開演説其後毎日晝は講話夜は演説なり、境野君は歴史の佛教を講じ加藤君は禪宗大意を辨じ予は實驗的信仰を説く他に類なき清閑なる會合にして數日静養を得たる亦白毫の恩賜と言ふべし。

六日より十日まで同じく甲州谷村町各宗聯合の講習會に赴く、石塚君、大島君、後藤君亦講師たり毎日晝講話を爲す予は釋尊傳を辨ず、夜は別に婦人會の爲に歎異鈔を講ず、谷村は富士登山の入口にして山川頗る清涼、大江寂往君小澤一君等の同朋と常に信仰を語る、

若松

十三日東京を出發して、夕刻に若松に着す、十四日より十六日に至る三日間講話を爲す、講本は歎異鈔會場は高野屋、此會合は和泉鐵次郎氏原卓一氏等の獨力主催する所に係る、若松分監に就きて教誨を爲し毎夜和泉氏宅に信仰談を爲す、三日間日子少しと雖、聽衆頗る眞摯、新に信仰に入れる人多し、冀くば將來佛種を播く益々普ねからんことを。

上田

十七日若松を出立し、其夜高崎に泊し、十八日信州に入り午後一時上田に着す、山極氏を初め上田女子求道會の人々皆

待ち受けらる、乃ち一場の講話を爲す、予過去三年常に信州に入る毎に必ず此地の同朋に會す、和氣團々として春風の如し、僅に三時間の會合互に満足して夕方出立す。

飯山

十八日晚豊野停車場に着す、佐崎幸喜君出て迎はる、乃ち千曲川に沿ふて夜中車を馳すること五里夜十時飯山に着す、予の飯山に來る五回因縁洵に深厚なりと謂ふべし、翌十九日早朝常磐村に至り、戸狩光明寺に着す、去る三十六年已後引續きて四年常に此地に修養會を開かれ、予毎年之に臨む、蓋し是れ稀有の事佛祖の冥助あるにあらずんば何ぞ能く此の如くならんや、會日は一週間、講題は、「人生問題と信仰」にして一總論、二悲觀思想と信仰、三倫理力行と信仰、四犯罪心理と信仰、五社會主義と信仰、六國家秩序と信仰、七世界宇宙と信仰なり、毎日午前學校に於て之を開き、午後は戸狩眞宗寺柳原正行寺に於て公開の講話を爲す、二十六日飯山に出て山本幸吉方に宿し、一晝夜公開演説を爲す、二十七日高梨君に送られて豊野を出立す。

善光寺

二十七日亡兒の忌日なるを以て善光寺に立寄り二十八日昧爽再び參詣し、昨年本月三十一日于此處を通過しつゝある際戰死せし從弟東溪大觀師、及亡兒追悼の微志を捧げ龜下に稽首禮拜し、其夜輕井澤に宿し、二十九日午後十時歸京す。夏季二ヶ月間傳道の間佛天の冥祐により其學を全うし各地同朋及有志諸氏の厚情を辱くせしこと夫れ幾許ぞや、茲に謹みて滿腔の感謝を捧げ、同朋諸氏の健康を祈る。

近角常觀著

信仰之餘瀝

第八版新に出來す

定價 拾五錢 郵稅貳錢

發行所

東京市本郷區四丁目五番地

文 明 堂

賣捌所

東京市本郷區森川町一番地

求道發行所

近角常觀著

懺悔錄

附錄 歎異鈔

第三版準備中

定價 貳拾錢 郵稅貳錢

發行所

東京市本郷區春木町二丁目二十二番地

森江分店

賣捌所

東京市本郷區森川町一番地

求道發行所

南條博士序 常盤學士撰

法句經

南北對照 和英漢譯

大判、約三百頁、紙質精良 印刷鮮明、頗美本 定價金四十錢郵稅金八錢 博文館發行

哲學雜誌の批評に曰く Dharmapada or Path of virtue 譯して法句經と言ふ、諸經典中の聖語の集録なり。佛教實に斯の如き簡にしてしかも有功なる經典を有す、何故に是れを一切の諸派に通じて家庭の讀み者、佛前讀誦の經文とせざりしが、思ふに餘りに共通なるが爲め、各其の門戸を張るには必要ならざりしが爲めか、或は又は事現世に於ける、道德上の言のみにて、大乘佛教としては餘り卑近なり現世的なりしが爲めか、其の何れにしても今や時代は門戸の守張を事とするべきの時にあらず、現世的道德的小乘的甚た可なり、今後此經典の大に世に流布せしむるを望む。其は單に佛教の爲めのみならず、一切世間の道德上より望まざるべからざるなり。常磐文學士の此著は余輩の立脚地なりするも、切に此點に於て世に推擧せざるべからざるなり。此經南北兩傳あり、學士即ち南傳は馬翁の譯本によられ、諸經を參照考合し、此傳に不足せる部分を補ひ、以て比較研究の一般を示さる、勞苦の多大なりし事誠に推察に餘りありと言ふべきなり。而して學士は更に藏經を和譯する事の「大乘に對して佛より始めの微志」より該經の和譯を試みたる。學士の手腕に於ては既に世に左評あり、今更余輩の云々すべき限りにあらず、今其の譯文を見るに軟ならず硬ならず、而も一種の力あり。若し譯文の上乗なるもの、標本を求むれば他に甚だ多しと雖も、茲には只特に最も有付なる句を取りて、紹介すべし。(百十三) 諸惡莫作、諸善奉行、自淨其意、是諸佛敎。(馬翁譯) Not to commit any sin, to do good, and to purify one's mind, that is the teaching of all the Awakened (學士譯) 罪を造らず、善といふべき善を勵めて、心の垢を洗ひ淨むる。是ぞ佛の敎なりける。以て其の一般を知るに足るべし。

取次所

本郷區森川町一番地

求道發行所

同

小石川區白山前町三十一番地

無我山房

月刊

無盡燈

一部 拾錢
半年 五拾五錢
一年 壹圓
郵税 不要

第十一卷第九號(九月一日發行)目次

- ▲研究
 - アナクシマンドロスのト・アバイロンに就いて 朝永三十郎
 - 宗教的經驗の種々 福來友吉
 - 眞如と頼耶の關係 舟橋水哉
 - 梵支大經偈頌の研究 泉芳景
 - ▲修養
 - 懷疑と法悅 塚本了整
 - ▲雜纂
 - 先德餘香 南條文雄
 - 天台宗典籍談 上杉文秀
 - 竹風蕉雨 南條文雄
 - 讀書餘談 安井廣度
 - ▲時論
 - 無教地布教論(風溪) 毒汁甘滴(相生) 根抵
 - なき教育(湘風) 豫想上の言論(旭川) 何等の
 - 没趣味ぞ(肅外) 思潮概観(電眼子)
 - ▲彙報
 - 新刊紹介 八月誌壇 時報 會報
 - ▲附錄
 - 梵文妙法蓮華經和譯 南條文雄

馬醉木三週紀念號

- 表紙畫 中村不折氏作五度摺木版色彩溫麗氣品あり。
- 挿畫一 子規先生の筆藤の畫と歌原幅の神を傳ふ。
- 挿畫二 結城素明氏の漫畫木版色摺野趣に富む。
- 挿畫三 地曳綱漁の寫眞、寫眞技の妙を聞く。
- 狹竹桃歌(連作短歌) 左 千 夫
 - 炭燭のむすめ(寫生文) 青 果
 - 短銃射撃(翻譯) 八 風 生
 - 松屋耳島齋(史傳) 川 上 三 桃
 - 詩(新體詩) 甲 之
 - 美々贊奈喜(短歌) 藤 眞
 - 艸香草落集(同上) 石 原 純
 - 青葉の隣(寫生文) 礎 生
 - 客中吟拙抄(短歌) 依 田 秋 圃
 - 春光集(同上) 志 都 兒
 - 詩歌製作の衝動と其表現法を論ず(評論) 三 井 甲 之
 - 「あやめ草」を讀む(同上) 三 井 甲 之
- 頁數平生に倍し議論沸騰製作又鳴る。餓て食するの食味を云ふは淺薄なり。渴して飲むの水味を稱するは平凡なり。吾がアシビは平々の間且々の内に趣味の盡る愉快を旨とす。
- (本號に限り一冊定價二十四錢郵税一錢)
- 發行所 東京本所茅場町三丁目 根岸短歌會

○御斷り

夏季傳道の爲め、八月分雜誌遅刊仕り遂に月を越へ候間本號九月分と相成り候次第に候何れ近々の中其の償ひとして御酬ひ可申上心積に候へども兎も角右御高察被下度奉願上候先は御斷りて早々

近角常觀校訂

冠 歎 異 鈔

一冊郵税共七錢
(定價五錢郵税二錢)
但三冊までは郵税貳錢

此歎異鈔は心を込めて出版したるものにして、可成讀み易き様に字をまばらに植ゑ、校正を嚴密にし、且つ冠頭を加へて、口傳鈔末燈鈔教行信證等の中より参考すべき文を引照して親切に作りたるものなり、敢て世の求道者諸君にすむ。

發行所

東京市本郷區
森川町一番地

求道發行所

規 定

- 一、本誌は毎月一回(一日)發行とす
- 一、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
- 一、本誌代金は必ず小爲替にて遞送の事
- 一、但郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事
- 一、本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の宿所通知する事
- 一、回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
- 一、本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	郵税一冊
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢	に付五厘

●廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢

- 一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事
- 一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地求道發行所」とせらるべし

明治三十九年八月廿七日印刷
明治三十九年九月一日發行

發行所

東京市本郷區森川町一番地

大賣捌所

東京市神田區神保町
同 本郷四丁目
同 文 明 堂

前號要目

求道

◎時代思潮と信仰問題

感謝

◎古聖賢◎無常の觀念◎來迎佛◎今日一日の事◎獨を愼む◎生死即涅槃

▲今日一日の格言

講話

◎相續心

聖傳

◎チャータカ釋尊傳—傳道

近角 常觀

告白

◎はてなきみめぐみ

雜錄

◎波斯紀行

歌咏

◎かくれが〔長詩〕

◎詩〔同上〕

◎湖〔短歌〕

時報

◎傳道紀行

刑部 妙子

鈴木 悌

甲 之

同 風

八 風

旭 村 生